

渡戸遺跡

発掘調査報告書



1996
580
6

1996

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

わたど
渡戸遺跡
発掘調査報告書

平成8年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター





調査区全景空中写真(西より)



集石土坑・SK 9 (J-4 グリッド)



土器



土器



クッキー状炭化物



遺物廃棄場



砾石出土状況



自然木調査状況

序

本書は、財團法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、渡戸遺跡の調査成果をまとめたものです。

渡戸遺跡は山形県の東側ほぼ中央に位置する天童市にあります。天童市はいで湯と舟掛駒の里として知られる、山形県における中心的な都市のひとつです。渡戸遺跡は天童市街地から東方、約4kmほど奥羽山地にはいった山口地区に所在し、押切川の形成した河岸段丘上に営まれています。

この度広域農道整備事業（村山東部地区）に伴い、工事に先立って渡戸遺跡の発掘調査を実施しました。

調査では、縄文時代の遺物廃棄場・墓坑などの遺構が見つかり、縄文土器・弥生土器・須恵器などの遺物が出土し、縄文時代から古代までという長期間にわたり断続的に利用された遺跡であることがわかりました。特に、発掘地点の中央部を東西に流れていた、旧川道にそって形成された捨場からは、縄文時代後期の土器や土偶などの貴重な遺物が多数発見されました。

近年、高速自動車道やバイパス、農業基盤整備事業など国県等の事業が増加していますが、これに伴い事業区域内で発掘調査を必要とする遺跡が増加の傾向にあります。これらの埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先の足跡を学び、子孫へ伝えていくことが、私たちの重要な責務と考えます。その意味で、本書が文化財保護活動の啓発・普及、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力いただいた関係各位に心から感謝申し上げます。

平成8年3月

財團法人 山形県埋蔵文化財センター
理事長 木場 清耕

例 言

1 本書は広域農道整備事業（村山東部地区）に係る「渡戸遺跡」の発掘調査報告書である。

2 発掘調査は山形県教育委員会の委託により、山形県埋蔵文化財センターが実施した。

3 調査要項は下記のとおりである。

遺跡名 渡戸遺跡 (CTDW) 遺跡番号335

所在地 山形県天童市大字山口字渡戸

調査期間 発掘調査 平成7年4月1日～平成8年3月31日

現地調査 平成7年5月8日～平成7年8月11日

調査主体 財團法人山形県埋蔵文化財センター

発掘調査・資料整理担当者

調査第一課長 佐々木洋治

主任調査研究員 野尻 侃

調査研究員 山口 博之

嘱託職員 渡辺 煙

4 発掘調査及び本書を作成するに当たり、山形県山形平野土地改良事務所、天童市教育委員会、天童市農林課など関係諸機関並びに、天童市の方々から協力をいただいた。また、現地調査にあたって、遺跡の立地に関する自然地理的観察については阿子島 功氏（山形大学）から、ご指導を賜った。ここに記して感謝申し上げる。

5 本書の作成・執筆は、山口博之、渡辺煙が担当した。編集は尾形與典が担当し、全体については佐々木洋治が監修した。

6 委託業務は下記のとおりである。

現地調査における平面図等の作成及び遺物実測の一部については、株式会社シン技術コンサルに委託した。

出土木材・出土種子・花粉の同定並びに分析については株式会社パリノ・サーヴェイに委託した。

7 出土遺物、調査記録類については、財團法人山形県埋蔵文化財センターが一括保管している。

凡 例

1 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記のとおりである。

S K…土坑 S B…建物跡 S T…住居跡

S L…炉跡 S P…ピット群 S …礫

R P…完形・一括土器・土製品 R Q…石器・石製品

2 遺構番号は、現地調査段階での番号をそのまま報告書での番号として踏襲した。

3 報告書執筆の基準は下記のとおりである。

(1)遺跡概要図・遺構配置図・遺構実測図中の方位は磁北を示している。

(2)グリッドの南北軸は、N-30° -Wを測る。

(3)遺構実測図は1/20、1/40、1/80、1/200縮図、その他で採録し、各採録毎にスケールを付した。

(4)遺物実測図・拓影図は1/2、1/3、1/4、1/5で採録し、各々スケールを付した。

遺物図版については任意としたが、重要なものについては10cmのスケールをいれている。また、一覧表という形で各々の法量を採録してあるので参照されたい。

(5)本文中の遺物番号は、遺物実測図・遺物観察表・遺物図版とも共通のものとした。

(6)土器の拓影の内、表裏を表したものについては、断面図を挟んで、右が表面左が裏面として、図を作製した。

(7)遺物観察表中の()内数値は、図上復元による推計値、または残存値を示している。

(8)遺構覆土の色調について、1987年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」に従った。

目 次

I 調査に至る経過	1
II 遺跡の概観	
1 遺跡の立地と環境	1
2 渡戸遺跡研究小史	4
3 調査の方法と経過	5
4 渡戸遺跡の層序	8
III 検出された遺構	11
IV 出土した土器	24
V 出土した土偶と土製品	46
VI 出土した石器と石製品	56
VII まとめ	66
抄録	67
付編	69

挿 図

第1図 遺跡位置図	3
第2図 渡戸遺跡出土土器	4
第3図 遺跡全体図	6
第4図 遺構配置概要図	7
第5図 A～J-1～2 グリッド 東壁土層断面図	9
第6図 F・I-1～5 グリッド 東壁土層断面図	10
第7図 遺構平面図	12・13
第8図 遺構平面分布図	15
第9図 遺構平面図(1)	16
第10図 遺構平面図(2)	17
第11図 遺構平面図(3)	18
第12図 遺構平面図(4)	19
第13図 遺構平面図(5)	20
第14図 遺構平面図(6)	21
第15図 遺構平面図(7)	22
第16図 主要出土遺物分布図	27
第17図 主要出土土器分布図	28
第18図 出土土器(1)	29
第19図 出土土器(2)	30
第20図 出土土器(3)	31
第21図 出土土器(4)	32
第22図 出土土器(5)	33
第23図 出土土器(6)	34
第24図 出土土器(7)	35
第25図 出土土器(8)	36
第26図 出土土器(9)	37
第27図 出土土器(10)	38
第28図 出土土器(11)	39

表

表1 土坑計測値一覧表	23
表2 出土土器計測値一覧表	45
表3 土偶・土製品計測値一覧表	55
表4 石器・石製品計測値一覧表	65

図 版

図版1 空中写真遺跡全景	
図版2 空中写真遺跡範囲・遺跡遠景	
図版3 F-4・E-4 グリッド東西壁、調査区東壁	
図版4 土器捨場調査状況	
図版5 土偶(RP83)出土状況、土器(RP42・43)出土状況	
図版6 自然木出土状況(G-6 グリッド)	
図版7 泥炭層調査状況(G-6 グリッド)、自然遺物出土状況(クルミ)、 自然遺物出土状況(種子)、土器出土状況(RP98)、完壊状況	
図版8 遺物出土状況(RP29・30)、RP34出土状況、RP16出土状況、RP10出土状況、 RP88出土状況	
図版9 RP54出土状況、RP53出土状況、RP48出土状況、RP60出土状況、 クッキー状炭化物出土状況、石斧出土状況、石皿出土状況、砥石出土状況	
図版10 遺構調査状況	
図版11 遺構調査状況、SK1検出状況、SK1調査状況、SK39調査状況、SK40調査状況	

- 図版12 SK 9 検出状況、SK 9 調査状況、SK35調査状況、SK35完掘状況、SK 2 検出状況、SK 3 検出状況、SK2・3調査状況、SK38調査状況
- 図版13 出土土器(RP34)、出土土器(RP14)、出土土器(RP60)、
出土土器(H-G-3グリッド)、同内面写真
- 図版14 出土土器(RP43)、出土土器(RP16)、出土土器(G-6)、出土土器(F-5)、
出土土器(RP98)、出土土器(RP109)、出土土器(RP99)、出土土器(G-5)
- 図版15 出土土器(H-3)、出土土器(G-5)、出土土器(RP78)、出土土器(H-5)、
出土土器(RP90)、出土土器(RP88)、出土土器(G-3)、出土土器(X-O)、
出土土器(RP30)、出土土器(G-6)、出土土器(E-5)、出土土器(H-4)、
出土土器(H-4)、出土土器(RP89)、出土土器(G-5)
- 図版16 土偶集合写真、土偶頭部、土偶体部、土偶下肢、土製円盤
- 図版17 出土土偶(RP22)、出土土偶(RP53+RP83)、出土土偶(RP61+RP12)、
出土土偶(G-3+H-3)、スタンプ状土製品(RP50)、
土版(RP9)、土版(RP5)、土版(RP8)
- 図版18 石鎚、石鎌、石匙、石匙、石斧、凹石、石皿、石皿(RQ12)、
石皿(RQ33+RQ10)、石皿(RQ17+RQ22)、石皿(RQ43)、
砥石(RQ14)、砥石(RQ20)、アスファルト付着石鎚、アスファルト付着石匙、
アスファルト付着石匙

I 調査に至る経過

天童市の北東部、奥羽山脈に接するあたりに位置する山口地区は、平地と山地が接する境に位置する。渡戸遺跡はこの山口地区の北側、上流から流れる押切川の形成した河岸段丘上に位置し、繩文時代晚期を主体とする遺跡として從来から知られていた。

渡戸遺跡の調査は、広域営農圏地農道整備事業（村山東部地区）を原因として、農道にかかる遺跡範囲について、発掘調査を実施し記録保存すること目的として実施された。調査実施までの経緯は次のとおりである。

- ・平成6年10月24日～25日………山形県教育庁文化財課による事業区域内の試掘調査により、繩文時代後期の集落跡を確認。
- ・平成7年1月18日……………山形県埋蔵文化財センターと事業主体の山形平野土地改良事務所との第1回目発掘調査事前打ち合わせ。
- ・平成7年3月24日……………山形県埋蔵文化財センターと事業主体の山形平野土地改良事務所との第2回目発掘調査事前打ち合わせ。
- ・平成7年4月19日……………山形県埋蔵文化財センターと山形平野土地改良事務所・天童市経済部農林課・天童市教育委員会・東南村山教育事務所との発掘調査事前打ち合わせ。
- ・平成7年5月8日～同8月11日………現地調査実施。

II 遺跡の概観

1 遺跡の立地と環境

渡戸遺跡の形成に最も大きくかかわってきたのは、遺跡の北を流れ押切川である。押切川はその名のとおり、遠く奥羽山地に源を発しながら、急峻な山地を開削し、その土砂を平野部へと押し出し、扇状地を形成する。急峻な山地から平野部へ一気に押し出された土砂が、渡戸遺跡の基底となっている。その後押切川は幾度か流路を変りつつ河岸段丘を形成した。正確には判別できないものの、数段の河岸段丘の形成が見て取れる。渡戸遺跡の今回の調査地点はその最も低い段丘面に所在し、標高は185m～186mを測る。押切川の現川床からの比高は約5m、遺跡の地山は段丘疊であり、一部には岩盤の見られる箇所もある。今回の発掘区は河岸段丘の一部と、旧河道の一部を調査したことになる。もとの地権者の情報では、畑には一部砂が深いところがあり、「ごぼう」や「長イモ」の栽培に適していたとのことであった。実際に砂の堆積が深い箇所が発掘区中央に検出された。それは旧河道であり、砂は川の流れによる堆積であることが分かった。

旧河道の形成は発掘区の中央付近に見られ、調査では溝水に悩まされた。しかしこのために植物質の遺存状況は良好であり、旧河道の一画には泥炭層の形成が見られた。さらに、旧河道に向かって北側から遺物の廻葉が行われている状況が伺えた。遺物の廻葉が行われ

たと考えられる箇所には土坑が當まれ、土坑の多くは集石を持つが、目立った共伴遺物は存しなかった。

今回の調査では、農道整備にかかる路線幅（約58m×約116m）の一部が対象となった。調査区の面積は1,500m²、そしてここから得られた遺物は、整理箱229箱であった。渡戸遺跡は表面採集資料をもとにした資料紹介も何度も行われ、約100,000m²にもなる、縄文時代後期の大集落跡として知られていた。しかし、縄文時代後期の遺物については從来知られていなかった。今回の調査で初めて確認されたものである。

周辺に目を向ければ、渡戸遺跡を含む奥羽山地周辺には多くの遺跡が分布している。これを図に表したのが第1図である。渡戸遺跡の周辺に最初に遺跡が當まれたのは縄文時代早期のことであった。渡戸遺跡から5kmほど上流に遡った、田麦野地区に所在する「かくまくぼ遺跡」である。この遺跡からは縄文時代早期中葉の貝殻沈積土器群が得られている。次の縄文時代前期と中期の遺跡は、明らかではないが、縄文時代中期から後期あるいは晚期にかけては、2「森遺跡」・9「杉ノ木山遺跡」・17「糠塚遺跡」などの遺跡が奥羽山地の山中の平坦地と、山麓にかけて分布する。やや平地には、21「綿掛B遺跡」があり縄文時代～弥生時代にかけて當まれている。「綿掛けB遺跡」の周辺には、18「千刈遺跡」・19「千苅条里遺跡」・20「綿掛けA遺跡」など古代の遺跡が多く當まれている。縄文時代の遺跡はその生産のありかたと関係して山地に多く分布し、弥生時代には稻作の普及とともに、平地に遺跡が當まれ、古代に入ると開拓と生産の中心が山地に移行していったため、山中にはほとんど遺跡の所在をみいだせなくなる、という姿を遺跡の立地から伺うことができる。

この周辺が縄文時代と同様な活発な活動を見せるのは、古代の末から中世にかけてである。この様相を伺い知ることのできる一つに、奥羽山地の山麓に多数分布している古代の窯業遺跡の存在がある。5「谷地中窯跡」・6「瀬戸山古窯」・7「二子沢窯跡」・8「原崎窯跡」などが上げられる。これら奥羽山地の平地からの傾斜変換点付近に當まれた古窯跡群は、ほぼ9世紀中頃から10世紀にかけての、限定された時期に當まれたもので、造営された数も数十基を越える数が予想され、当地域は古代村山郡城の一大窯業センターであったことが想定される。

中世に入ると若松観音と地元で呼ばれる、「若松寺」に関係して當まれたであろう中世遺跡が幾つか見受けられる。「若松寺」は最上三十三観音の第一番札所であり、奥羽山地がわに山を越えた場所に所在する、山形市山寺「立石寺」と密接な関係のもとに栄えた、中世山寺地域を代表する寺院のひとつである。この「若松寺」との関係のもとに當まれたのが10「田畠墳墓」・11「山居墳墓」などの、中世墳墓群である。低いマウンドを持ち方形あるいは円形の外形を呈する。開墾以前は多数の中世墳墓が見られたが、現在ではほとんど失われている。12「山家城」などの中世城館も、中世後期には當まれている。



1. 渡戸遺跡(縄文)
2. 青遺跡(縄文)
3. 芥井原遺跡(古代)
4. 谷地中窯跡(古代)
5. 濱戸山古窯(古代)
6. 七子瀬遺跡(古代)
7. 萩原古窯跡(古代)
8. 原崎窯跡(古代)
9. 杉ノ木山遺跡(縄文)
10. 田畠墳墓(中世)
11. 山居墳墓(中世)
12. 山家城(中世)
13. 天保元年(古文)
14. 鳥居門遺跡(中世)
15. 石打遺跡(古文)
16. 稲荷山遺跡(古文)
17. 糠塚遺跡(古文)
18. 千刈遺跡(古文)
19. 千刈条里遺跡(古文)
20. 綿掛けA遺跡(古文)
21. 綿掛けB遺跡(古文)
22. 糜田遺跡(古文)
23. 舟ノ町遺跡(古文)
24. 天保城(中世)
25. 舟ノ町里遺跡(古文)
26. 山崎C遺跡(古文)
27. 山崎D遺跡(古文)
28. 山崎A遺跡(古文)
29. 山崎B遺跡(古文)
30. 白山堂A遺跡(古文)
31. 白山堂遺跡(古文)
32. 白山堂B遺跡(中世)
33. 京急川東遺跡(古文)
34. 新城山窯(中世)
35. 新成山窯(古文)
36. 新庄(古文)
37. 東新寺寺跡(古文)
38. 八幡山古墳(中世)
39. 八幡山古墳(中世)
40. 猿野沢遺跡(古文)
41. 沼沢・要寄遺跡(中世)
42. 向原(古文)
43. 觀音寺白山古墳(古文)
44. 野川古墳(中世)
45. 旗張後坂(中世)
46. 大糸山古墳(中世)
47. 大糸道遺跡(古文)・中世)
48. 田邊遺跡(古文)
49. 田邊窯跡(古文)
50. 田島山窯(中世)
51. 井A遺跡(古文)
52. 亂川墳墓群(古文)
53. 押切遺跡(古文)

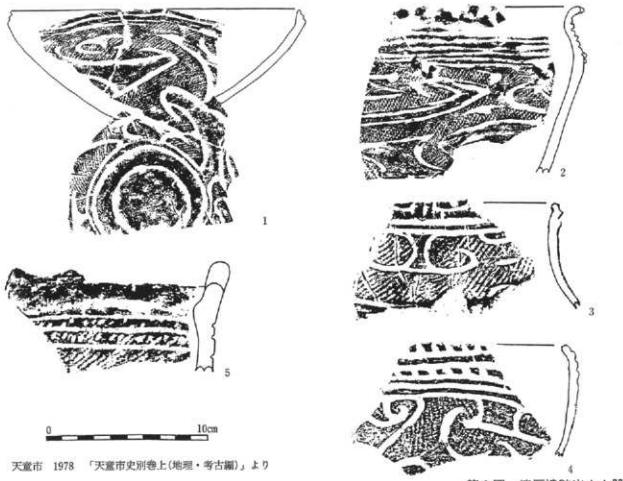
第1図 遺跡位置図

2 渡戸遺跡研究小史

渡戸遺跡の調査に至るまでの研究史について触れておきたい。渡戸遺跡は、縄文時代晚期の集落跡として知られていた（第2図）。表面採集資料をもとにした資料提示も、「天童市史（考古資料編）」などで行われている。第2図の1から5に表した資料もその中で紹介されたものである。ここに図示した土器群はほぼ大洞C,からC式の、縄文時代晚期中葉の土器群に比定することが出来よう。しかしながらこのほかの時期に亘る資料としては、縄文時代中期の資料が少數得られているに過ぎなかった。

地元の方々も渡戸遺跡の開墾や開発にともなって、多種多様な遺物を採集している。これらは村落内の各家に所蔵されている他に、社のご神体として、石碑が祀られたりなどもしている。これらの遺物も縄文時代晚期あるいは中期の遺物が主体的である。これは実際には遺物が採集出来るのは、河岸段丘での上位の面であり、ここからは縄文時代晚期の遺物が主体的に採集される。この面を中心として遺物が採集されて来たためであろう。

今回の調査では縄文時代後期中葉の良好な資料が得られたわけだが、從来今回の発掘調査地点については、河岸段丘の一番下であることも手伝ってほとんど遺物が採集されることとはなかった。縄文時代後期の遺物は、今回の調査でほとんど初めて確認されたものであり、山形県内でも類例が少ない貴重な資料である。このことは、渡戸遺跡の年代観に新しい視点をもたらすこととなったとともに、遺跡の範囲がさらに拡大することを確認させることになった。



天童市 1978 「天童市史別巻上(地理・考古編)」より

3 調査の方法と経過

調査にあたり遺跡の立地する地形を加味し、諸記録の基準として5メートル方眼のグリッドを設置した（図3）。グリッドの基準軸について南北軸をA～Z、東西軸を1～9とし、交点を左上に見た位置を、そのグリッドのグリッド名としてとらえることとした。

調査区内の環境整備の後、発掘区内の微地形や遺構・遺物の様相を探る目的から、幅約50cmのトレンチを、発掘区の外周全体と、さらに補助的に南北方向に3本設定した。同時に文化財課の試掘坑をも再調査し状況を再確認した。これらの結果、発掘区の南側と北側に拳大から小頭の大礫が密集し、中央には砂質の土壤が堆積しながら、ほとんど礫は見られないという状況であることが判明した。中央に旧河道が東西に走り、それをはさんで南北に段丘疊が存在することが予測された。

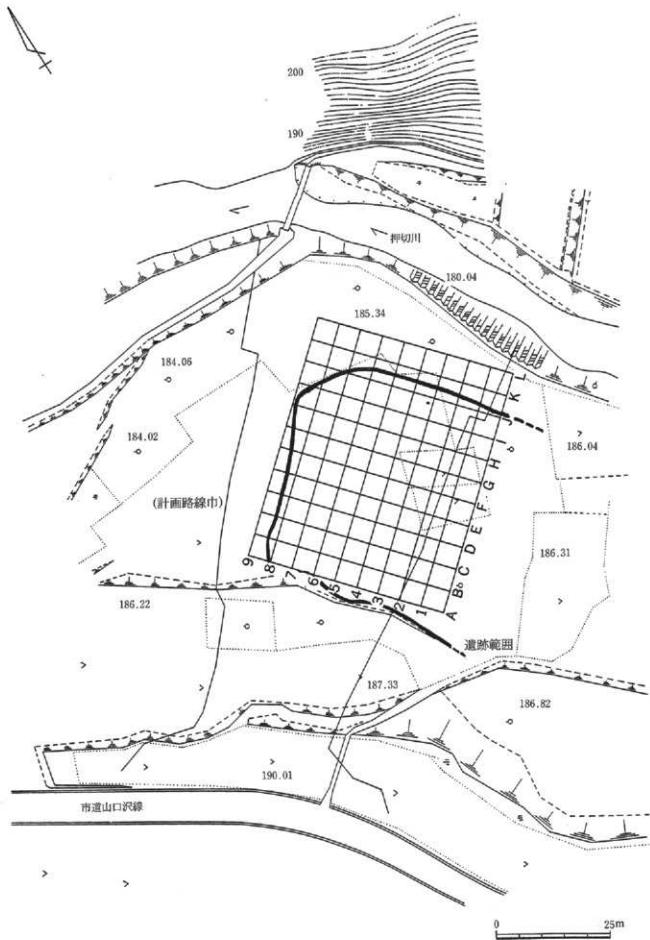
礫の分布する箇所には遺物はほとんど分布しなかったため、重機を使用して表面の土を耕し、調査を進めることとした。旧河道の地区については、表土を重機で取り除いた後、人手で旧河道底面まで掘り下げることとした。しかしながら、旧河道の深度が予想以上に深く、砂層と砾層の互層となっており、人力での作業が詰みにくい状況であったため、重機を再導入して、旧河道に堆積していた砂と礫を耕すこととした。

調査の具体的な進行としては、重機により表土を取り除き、次には人手で土の色や土の質に着目しながら、ていねいに面削りを進め少しづつ掘り下げて精査した。発見された遺構や遺物は、記録保存の目的のため写真や図面に記録した。

調査の開始にあたり、遺跡付近の字限図を天童市教育委員会から提供していただいた。これによれば、調査区についてはほとんど明治時代からの地形が残っており、ほとんど改変されていない状況が伺えた。調査に当たっての聞き取りでも、旧地形は改変されていないとのことであった。遺跡の遺存は良いことが予想された。

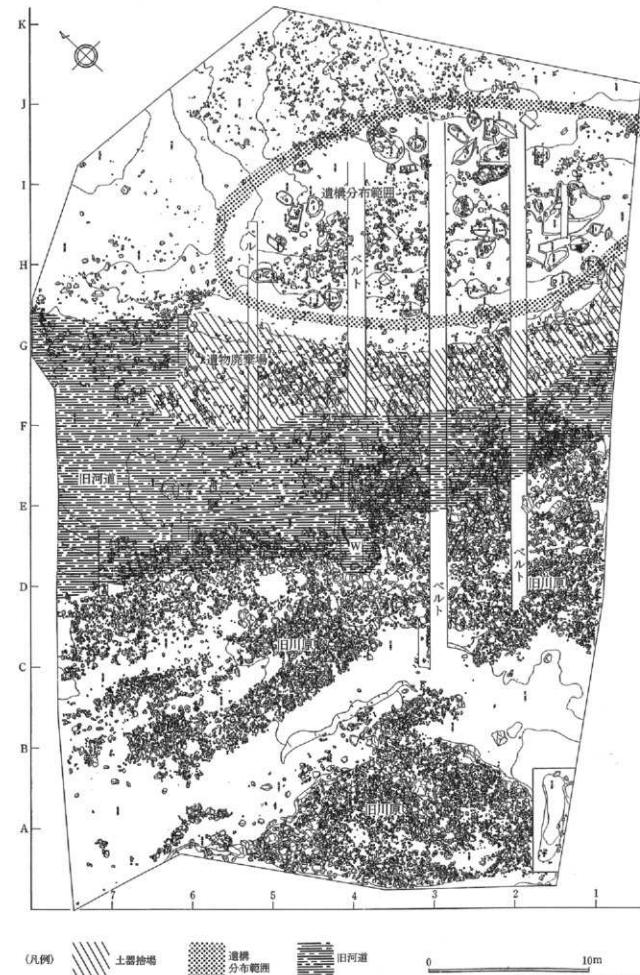
調査の進行に伴って調査区内の、内容や性格が明らかになってきた。第4図に遺構配置を概念化した図を提示したが、A～D～2～9グリッドとH～K～1～9グリッドでは礫が集中している状況が見られた。この両地区は中央にはしる旧河道の河原であることがわかった。これらのうちA～D～2～9グリッドにおいては遺物の出土がほとんど見られなかった。しかし、H～K～1～9グリッドの一部においては、礫がまばらな箇所が存在し、そこには遺構が集中していた。ここからは外形は円形を呈しながら、袋状の掘方を持ち、土坑内には集石を持つという、特徴的な土坑を多数検出できた。この土坑群の旧河道寄りの斜面には、G～H～2～8グリッドにわたって、最大の厚さが約50cm程になる、遺物廃棄場が形成されていた。旧河道の右岸である、土坑の集中箇所から、遺物の廃棄がなされている状況が伺えた。今回の出土遺物のほとんどがこの土器捨場からのものである。D～H～2～9グリッドには旧河道が検出された。この埋没河川には少なくとも3回の氾濫と静穏な時期があったことがわかった。川底まで掘り進めたところ、湧水が激しく、調査が難航した。しかし水位が高いために、E～5グリッドで泥炭層を検出することができた。ここから、自然木や植物など多数の自然遺物を得ることができた。

II 遺跡の概観



第3図 遺跡全体図

II 遺跡の概観



第4図 遺構配置概要図

II 遺跡の概観

4 渡戸遺跡の層序

渡戸遺跡は押切川の段丘上に営まれた遺跡である（巻頭カラー写真）。このため数段の河岸段丘の形成が見られる（第3図）。今回の発掘区の立地する箇所は、その最も河川に近い、低位の段丘面である。

基本層序を見てみれば、遺跡の地山を成すのは段丘疊である。その上位に、河川によって運ばれたと考えられる、疊層や砂層そして黒色土などの堆積があり、これが遺物包含層となる。中央にはしたる旧河道では、疊層や砂層そして黒色土などが互層となっており、数回の氾濫と静穏な時期の繰り返しが見られた。旧河道の川床では湧水が多く、一部には泥炭層の形成が見られた。

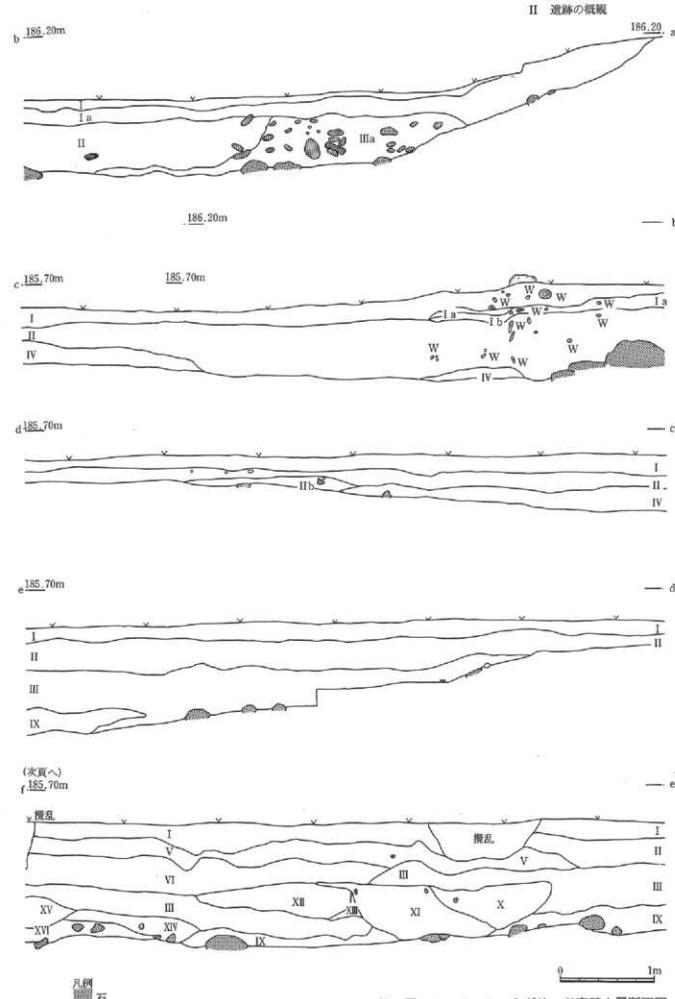
発掘区は、畑地として耕作されていたため、平坦になっているが、川床を成すと考えられる疊の存在状況から見れば、高低があるため、本来の微地形は平坦ではなかったものともわかる。

次に、A～J—1～2グリッドの東壁の土層断面図（第5・6図）によりながら、旧河川の埋没状況について述べてみたい。また、F・I—5グリッド東壁の土層断面図（第6図）によりながら、捨場の遺物の堆積状況について述べてみたい。

A～J—1～2グリッドの東壁の土層断面図は、発掘区全体の東壁を記録したものである。この中の基底面に見える石の表示の部分が段丘疊である。A～J—1～2グリッドの東壁の全体に渡って分布している。E～H—2グリッドにかけて凹んでいる部分が見られるが、ここが旧河川の河岸である。川床の直上の第XVI層が廃棄層である。これは、G・H—2～8グリッドにかけて形成されていた。最大の厚みは50cmほどであり、ほとんどが土器のみで構成されている。ここに廃棄されている土器は、細片や磨滅した個体もあるが、大きい破片や表面の腐滅していない個体も多い。旧河川の中央部で石斧や磨石が出土しているが、いずれも磨滅が少なく、水の流れの緩やかな時期に、斜面から廃棄されたものと考えられる。

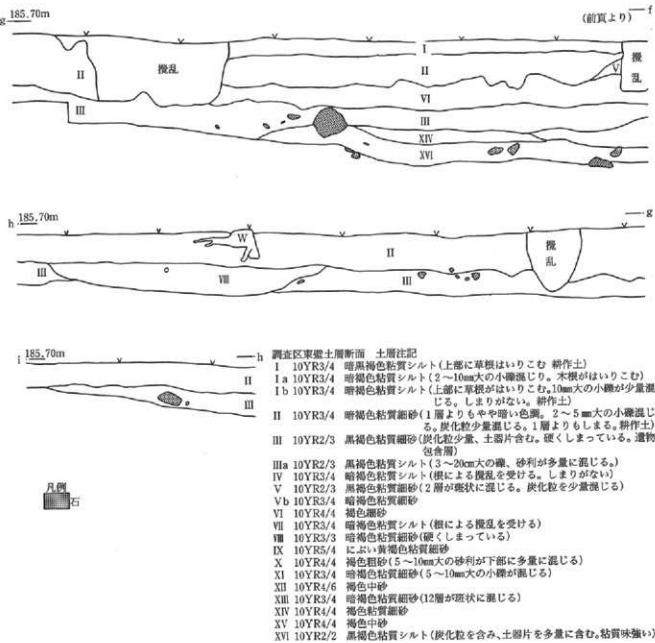
河川の堆積状況としては、基底面の直上の第XVI層が黒色のシルト質の土層であり、その直上のⅣ層・Ⅴ層・Ⅵ層・Ⅶ層には、流水によると考えられる、砂層が堆積している。さらにそれに隣接して、Ⅺ層・Ⅻ層・Ⅹ層という疊を含む層が存在する。これは洪水などの時に堆積したものと考えられる。Ⅳ層・Ⅴ層・Ⅵ層・Ⅶ層・Ⅺ層・Ⅻ層・Ⅹ層には遺物はほとんど含まれない。氾濫そして静穏な時期を繰り返していたことがわかる。渡戸遺跡の主体を成す、縄文時代後期の土器群は、基底面の直上の第XVI層から中心的に出土している。一部に弥生式土器や須恵器が見分けられるが、弥生式土器はⅦ層あるいはⅨ層からの出土と考えられ、縄文時代後期の一群の土器とは層位差があり、流れ込みであろう。おなじく須恵器に關しても流れ込みであろうと考えられる。

F・I—5グリッド東壁では、3層・5層・6層から遺物を検出できたが、間に4層という無遺物層を挟むものの、土器の様相は変わらず、接合もあったためほとんど時期差は認められないと考えられよう。また、向かって左手の側から廃棄されている事が分かる。

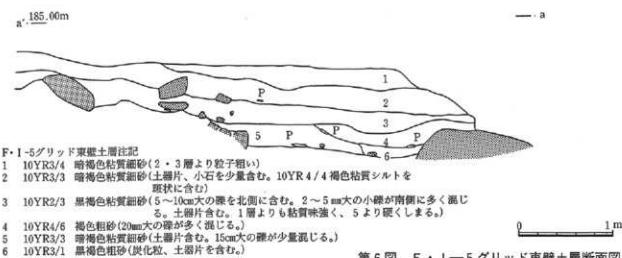


第5図 A～J—1～2グリッド東壁土層断面図

II 遺跡の概観



F-1-5グリッド東壁土層断面図



第6図 F-1-5グリッド東壁土層断面図

III 検出された遺構

III 検出された遺構

渡戸遺跡の調査で検出された遺構は、土坑が34基、性格不明土坑が3基、遺物廃棄場が1箇所であった(図7)。また、遺構は発掘区全域に分布しているわけではなく、第4図に遺構分布範囲として表した、限られた範囲に分布していた。これを拡大したのが第9図である。遺構の種類についても、住居跡やピットなどの生活に直接結び付く遺構は、ほとんど見られなかった。土坑は集石を持つ特徴ある一群が主体となっている。土坑の様相については表1として一覧化しておいた。なお、遺跡はさらに東側につながるため、あくまで一部の調査であることを確認しておきたい。

・土坑と性格不明土坑について

最初に土坑と性格不明土坑についてまとめておきたい。第9図は土坑が分布する地区について表したものであるが、H-J-1-2-7グリッドに集中することが分かる。この地点は平坦であり、遺跡の底基をなすまでに間に、若干の土壤の堆積が見られる地点である。このため土坑の遺存が良く、この地点のみで集中して土坑が検出されたという可能性も在るが、発掘区の他の箇所では、H-J-1-2-7グリッドのように遺物が集中する箇所は検出されない。このことから、当初からこの箇所でのみ遺構が営まれていたと考えたい。

検出された土坑と性格不明土坑を第9図へ第14図にまとめた。これらはいくつかの型式に分類することができる。

・第1類：平面形が50cm～80cmの円形を呈し、20cm～30cmの半円形の掘り込みを持つもので、検出面以上には拳大から小兒頭大の礫数個による集石を持ち、覆土中にも拳大から小兒頭大の礫が入るもの。

(第9図SK1・SK2・SK3、第10図SK40・SK39・SK9、第11図SK41・SK35・SK8、第12図SK38・SK30、第37図SK37・SK25)

・第2類：平面の長軸120cm程であり、短軸が50cm～60cm程の、梢円形を呈し、覆土中には、礫は明確には持たないもの。

(第12図SK7、第13図SK27)

・第3類：平面が不整形であるもの。

(第14図SX3・SX11)

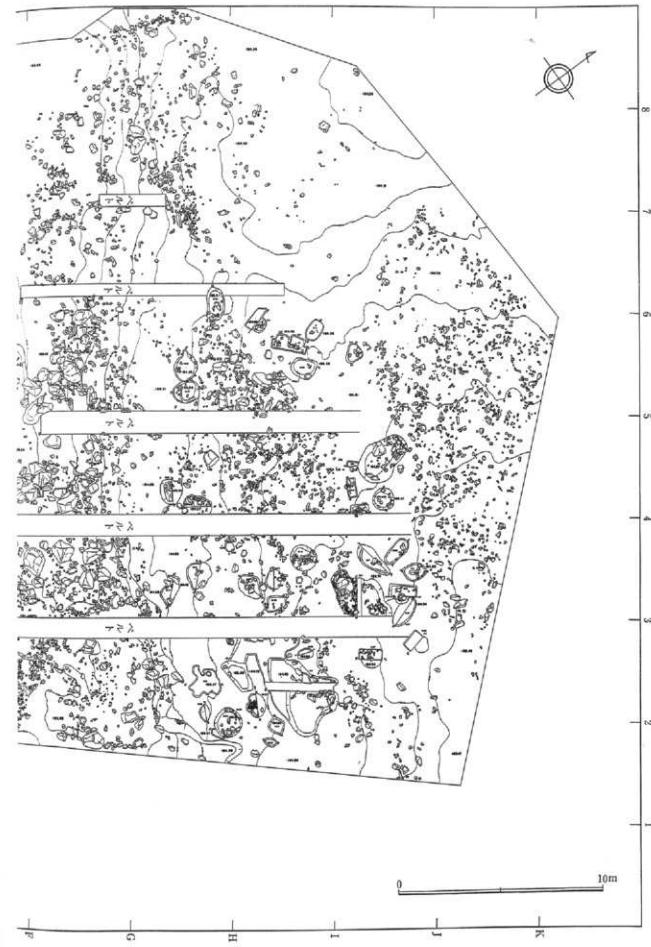
第1類と第2類は、先に述べた土坑として確認したものであり、第3類は性格不明土坑として確認したものに当てはまる。

この中で、最も多数検出されたのが、第1類として分類した土坑である。平面形は50cm～80cmの円形であり、地上には拳大から小兒頭大の礫、数個による集石を持つものが大半である(巻頭カラー・図版11・12)。SK1では小兒頭大の礫が6個円形に配置されていた。SK2・SK3・SK9・SK41・SK35・SK8・SK38・SK30・SK37・SK25でも同様な礫の配置がみられる。検出面以上に表れている礫は、2～3個から8個前後が多い。これを取り去ると覆土中の礫が表れる(巻頭カラー)。

III 検出された遺構



III 検出された遺構



第7図 遺構平面図

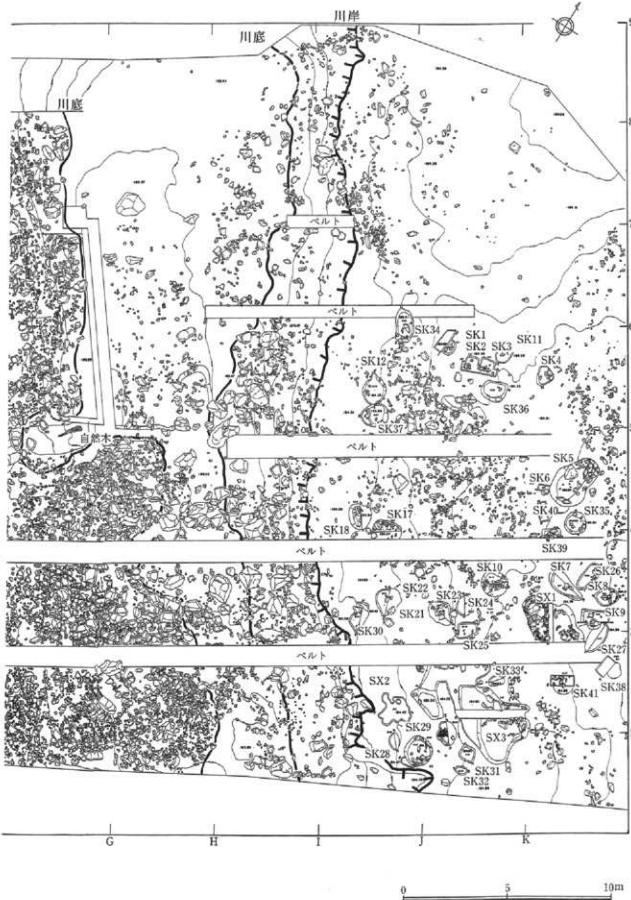
SK40・SK39では明確な掘り方を確認できなかったが、覆土中の集石の様子を見ると、円形の掘り方があったと予想される。掘り込みは20cm~30cmの半円形を呈している。覆土中には拳大から小兒頭大の礫が、密集して入っているものと、密集しないものがある。覆土は大半のものは1層のみの構成であり、黒っぽい土壤が充満している。土坑の内部には伴出遺物はほとんどない。同様の土坑は秋田県の南部の奥羽山地側、「八木遺跡」でも確かめられている（秋田県文化財調査報告書第181集）。ここは绳文時代後期の前半を中心とする遺跡であり、渡戸遺跡とは時期的にも近接する。遺構の様相も近似している。八木遺跡ではこれらの遺構について、土坑墓の可能性を指摘している。

・遺物廻棄場

次に遺物廻棄場の様相についてまとめたい。発掘区のなかの土坑の営まれる地点は、第8図のGラインを境として、急激に川に向かって落ち込んで行く地点でもある（第8図）。この土坑と遺物廻棄場はどういう関係があるのだろうか。遺物の廻棄はGラインを境として見た場合に土坑分布域側の、北側の川岸から行われている。土坑群と遺物廻棄場の関係は明確ではないものの、両者が近接する位置関係からすれば、伴出している遺物は同時期であるため、土坑群の祭祀などにかかわって、捨場が形成された可能性も指摘できる。また、土偶の出土状況などに注目した場合、ここには体の一部分だけが捨てられ、土偶の全身が捨てられているわけではない。このため、丹念に接合しても全身が崩れてしまうことはなかった。このことから、この捨場を形成する上で、ただ廻棄するといったことではなく、なんらかの選択行為があったことも伺える。

・泥炭層について

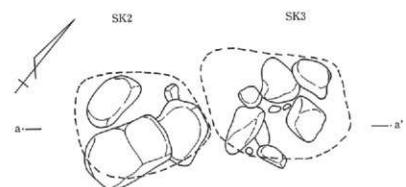
E-6グリッドの現表土下1.5m~2mほどの地点に、泥炭層の形成がみられた（第15図・巻頭カラー・図版6・図版7）。範囲は約3m²という狭い面積であった。発掘区の中央を走る、旧川道の川床部分にあたり、湧水が激しい箇所であった。このため自然木、種子などの自然遺物が、多量に遺存していたものと考えられる。これらの自然遺物が大量に遺存していた層は、E-6グリッド西壁土層断面図（第15図）の6層である。検出された自然遺物については、「パリノ・サーヴェイ株式会社」に委託し、自然科学的分析を行った。なお結果については、付録として掲載した。調査ではまず、長さ1m最大幅70cmの自然木（RW1）が検出された（第15図）。その後周囲を拡張した所、種子や土器などの遺物が出土した。自然木のすぐ下には、RW11~RW22がRW1を支えるように残っていた。RW1の樹種はケヤキであり、水辺には生えないため、人為的に運ばれたものと考えることもできる。想像をたくましくすれば、RW11~RW22とRW1は、木道とその基礎の可能性を考えることもできよう。そして、この周囲の箇所に遺跡周辺から、様々な自然遺物が流れ込み堆積したものであろう。遺存していた自然遺物で特徴的なのは、種子類の多さである。食用の種子だけでも、オニグルミ・クワ属・マタタビ属・ブドウ属・トチノキなどが確認された。これらは当時の植物利用の実態の一面向を反映しているのであろう。また、食という視点からは、第39図に提示したクリーク状炭化物も重要である。



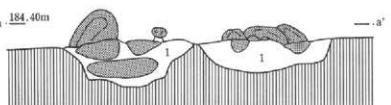
第8図 遺構平面分布図

III 検出された遺構

SK2-3
(I-6)

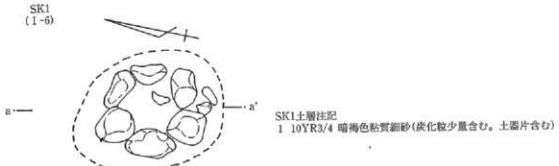


a 184.40m



SK2-3土層注記
1 10YR3/4 暗褐色細砂(2~5mm大の小礫が混じる、硬くしまっている)

SK1
(I-6)



SK1上層注記
1 10YR3/4 暗褐色粘質細砂(炭化粒少量含む。土器片含む)

a 184.70m



0 1 m

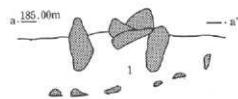
第9図 遺構平面図(1)

III 検出された遺構

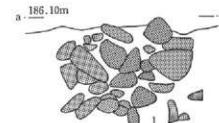
SK40
(I-5)



SK39
(I-5)



SK40土層注記
1 10YR4/4 暗褐色細砂

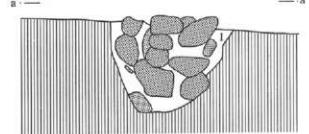


SK39土層注記
1 10YR3/4 暗褐色細砂

SK9
(I-4)



a 185.30m

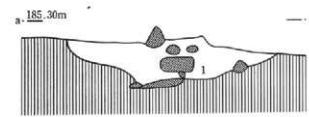
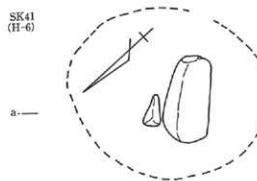


SK9土層注記
1 10YR3/4 暗褐色粘質細砂(炭化粒を含む)

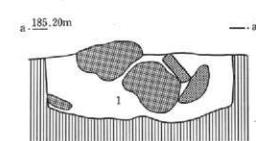
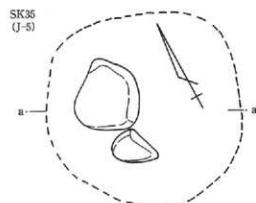
0 1 m

第10図 遺構平面図(2)

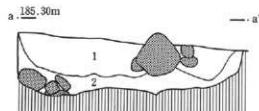
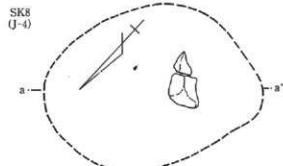
II 遺構の概観



SK41土層注記
1 10YR3/4 暗褐色細砂(炭化粒を少量含む)。土器片を含み、硬くしまっている。



SK35土層注記
1 10YR3/4 暗褐色細砂(炭化粒を少量含み、硬くしまっている)

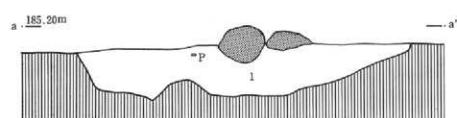
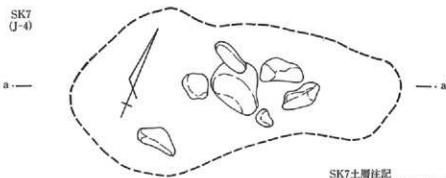


SK8土層注記
1 10YR3/4 暗褐色細砂(2cm大の礫が少量混じる。
炭化粒を少量含む)
2 10YR4/4 黄褐色細砂(1層が透視に現じる)

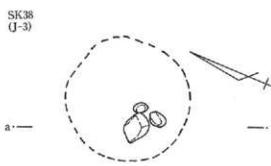


第11図 遺構平面図(3)

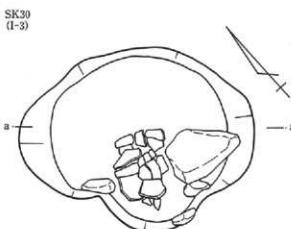
III 検出された遺構



SK7土層注記
1 10YR2/3 黒褐色粘質細砂(炭化粒を少量含み、土器片を含む)



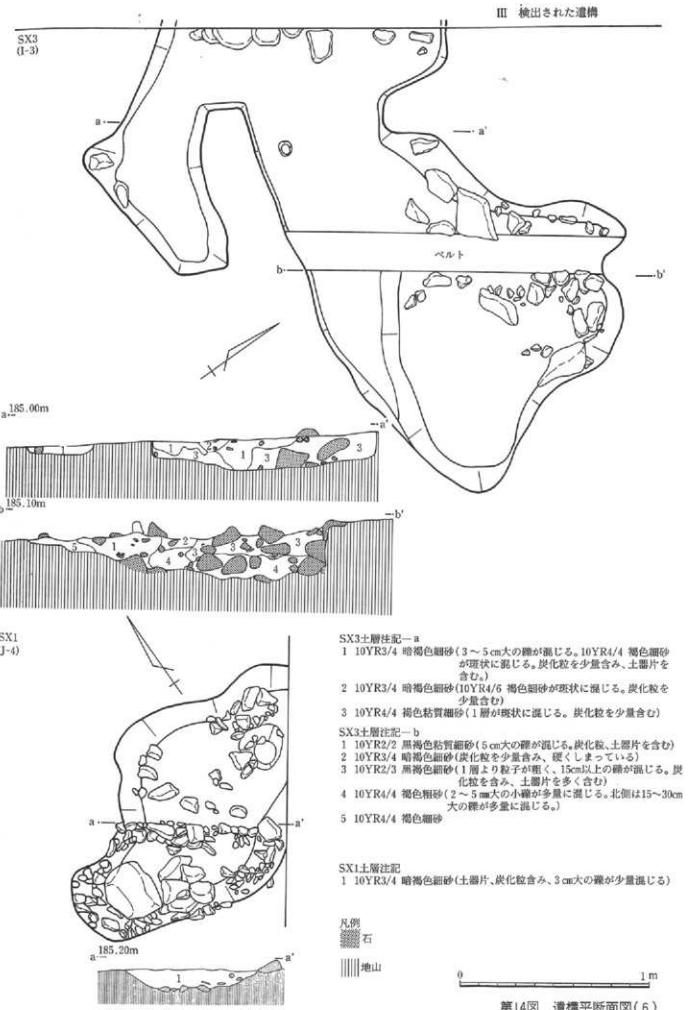
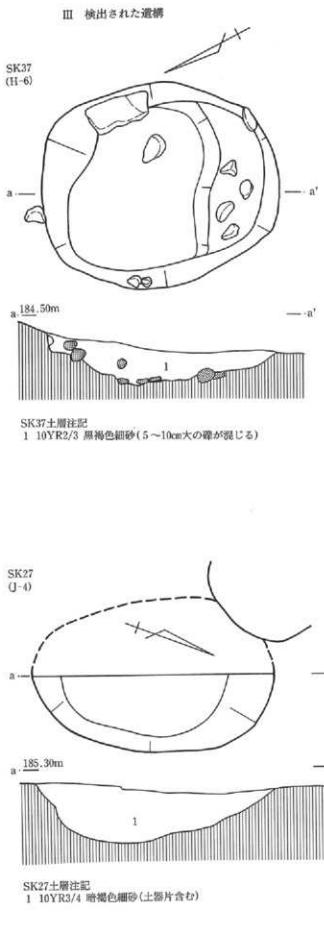
SK38土層注記
1 10YR3/4 暗褐色粘質細砂



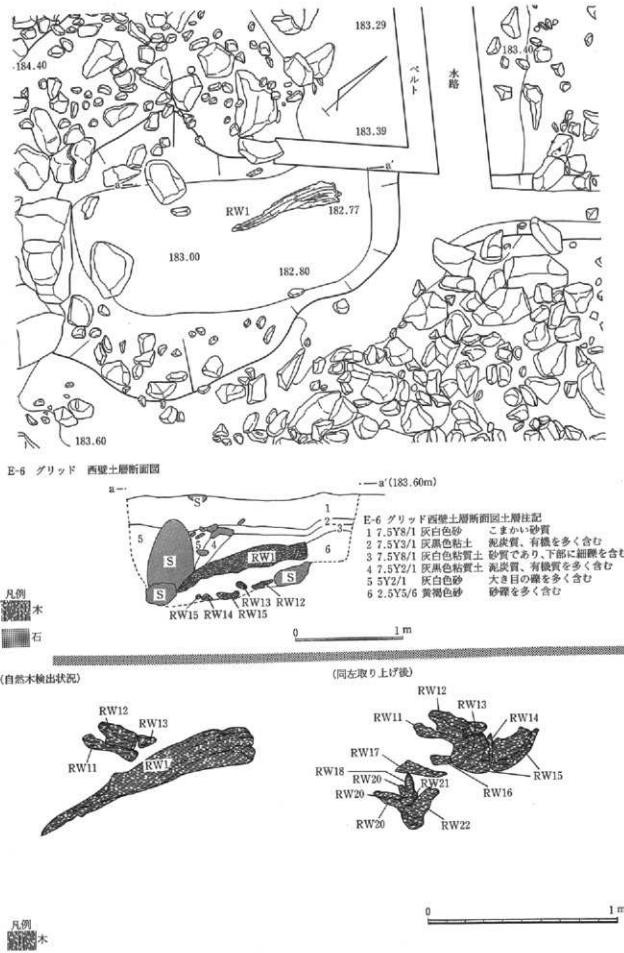
SK39土層注記
1 10YR3/4 暗褐色粘質細砂(炭化粒、土器片を含み、硬くしまっている)
2 10YR3/3 带褐色細砂(根による埋没)



第12図 遺構平面図(4)



III 検出された遺構



第15図 遺構平面図(7)

III 検出された遺構

表 I 土坑計測値一覧表（几例）

・形状として、その確認面の平面形により、円・梢円そして、それ以外の形であるものを不整形としてまとめた。
・大きさで()としてあるものは、残存値である。

No	検出地区	形 状			大 き さ (cm)	備 考	挿図
		円	梢円	不整形			
SK 1	I-6	○			57 (45) 30		9
2	I-6	○			65 (33) 21		9
3	I-6	○			73 (38) 34		9
4	J-6	○			101 79 32		
5	J-5	○			271 189 64		
6	J-5		○		55 (32) 21		
7	J-4	○			204 87 30		12
8	J-4	○			106 85 32		11
9	J-4	○			68 (34) 48		10
10	I-4	○			132 121 70		
11	I-6		○		112 72 26		
12	H-6				155 116 25		
13	H-5	○			123 111 4.3 RQ42		
14	H-5	○			138 (96) 36		
15	H-4				58 (28) 13		
16	H-4	○			127 77 13		
17	H-4	○			136 126 17		
18	H-4	○			55 42 19		
19	I-4	○			140 103 2.6		
20	I-4	○			97 79 14		
21	I-4		○		110 77 14		13
22	J-4	○			153 70 72		
23	J-4	○			157 83 60		13
24	H-3	○			87 51 25		
25	H-3	○			146 138 3.3		
26	I-3	○			117 97 20		12
27	I-2	○			81 73 21		
28	I-2	○			61 42 17		
29	I-2	○			78 50 8		
30	H-7		○		164 86 30		
31	J-5	○			107 105 37 RQ13・43		11
32	I-6	○			118 100 38		
33	H-6	○			131 110 25 RQ37・RP86		13
34	J-3	○			77 (57) 33		12
35	J-5	○			91 (45) 54		10
36	J-5	○			97 46 32		10
37	H-6	○			98 (40) 30		11
SX 1	J-4	○			(189) 245 31 RQ12・39		14
2	H-3	○			158 160 15		
3	I-3		○		355 330 49 RP86		14

IV 出土した土器

渡戸遺跡からは整理箱で229箱という多量の遺物が出土し、その大半は土器である。出土した土器の総数のうち約95%以上が、遺物廻叢場（第8図）と表示した、G～H—2～8グリッドからの出土である。残りの地区からは約5%ほどが出土したに過ぎない。今回の調査区の全体の面積は、約1,500平方メートルである。G～H—2～8グリッドに所在する、遺物廻叢場は約175平方メートルであり、その面積の全体面積に対する比率は11%に過ぎない。約11%の面積から、約95%の土器が出土しているということは、今回の発掘調査にかかる地点の特殊性として、特筆されるであろう。第16図に主要遺物平面分布図を載せた。これはG～H—2～8グリッドに所在する、遺物廻叢場における、主要遺物の分布状況を表示したものである。土器の主要な遺物をその出土地点毎に整理したのが、第17図である。主要な遺物については、表2として計測表を作製した。

土器はたいていは破片に分かれて出土している。隣接する2グリッドから得られた破片が接合する事例もある（51）。しかし、2グリッド以上の距離を持って接合するものは少なく、廻叢は一か所から行われたことが推測される。また全体的に時期的にも近接している時期の遺物が多いめ、長期間継続的に使用された捨場ではないことも推測できよう。

土器は時期的特徴で第I群土器～第V群土器に大別し、それぞれに描出された文様あるいは器形の特徴などによってさらに各類に細別した。完形土器あるいは破片資料についてはその掲載箇所毎に、グリッド名などについて注記した。

第I群土器（縄文時代後期中葉の土器）

縄文時代後期の磨り消し繩文や貼り瘤をもつ土器を本類とした。土器捨場から検出されている。本遺跡の中心となる土器群である。文様の特徴によりさらに各類に細別する。

・第1類土器（94～98）

地文に太い沈線を持ち、直線や曲線で区画した中を、磨り消などの手法で、文様を描くものであり、器壁はほかの類に比較して厚い。器形としては大ぶりな深鉢がある。底部と口縁部形態は明らかではない。出土量は少ない。

・第2類土器（99～103）

浮線上に連続した押出で鉛状のモチーフを作ったり、2本の平行する沈線間に連続した圧痕を施すもので、器形としては大ぶりな深鉢がある。口縁部には半円などに突出する装飾がある。出土量は少ない。

・第3類土器（1、104～123）

地文に繩文を持ちながら、数条の平行沈線で、直線や曲線の文様を描くものであり、沈線間は狭くかつ集合沈線化している。文様帶には矩形の磨り消し繩文や、細い帯状の繩文帶を描き、曲線的になる場合もある。無文帶を竹管で充填したり、連続した刺突をもつものもある。出土量はやや多い。

・第4類土器（2、3、124～136）

地文に繩文を持ちながら、沈線の区画により直線や曲線の文様を描くものであり、文様帶には、細い帯状の繩文帶を描き、曲線的になる場合もある。口縁部には、大ぶりな波状の突起がつくものと、分厚くかつ大ぶりな装飾突起が付くものがある。器形は深鉢と壺型土器がある。深鉢は、直立しながら頸部で、やすぼまりながら外反するものと、脚部で丸みを持ちながら、ゆるやかに口縁部にかけて開くものがある。壺型土器では肩に段があるものと、口縁部に向かってゆるやかに伸びるものがある。出土量はやや多い。

・第5類土器（4、5、12～16、18～22、25～26、28～30、35、139～168）

第4類と同様な文様構成を持つものであるが、繩文による文様構成が曲線的なものをまとめた。繩文による文様構成が半弧を繰り返す鉢形の土器（12、13、14）が見受けられる。器形は深鉢と鉢型土器・壺型土器がある。第4類に比較してやや器形が大ぶりになる。また、頸部で内済する器形（143、145、146）がある。皿形あるいは大きい椀となる器形（16～167～169）がある。なお、高台を持ち椀がる器形があり、脚部（33、34、36～42）が出土している。これらは、第4類～第6類のいずれかに含まれるものと考えておきたい。この類の出土量は多い。

・第6類土器（170～189）

第4～5類土器と同様な文様構成を持つものであるが、文様が曲線的であり、無文帶や磨り消しの幅が狭いものである。口縁部には断面形が鶴卵状をなす扁平な突起（174、177）が付く。器形の大小はあるがいわゆる深鉢型を呈する土器である。この類の出土量は少ない。

・第7類土器（7、8、27、178～189）

第4～5類土器と同様な文様構成を持つものであるが、繩文が残されている箇所には、筋の細かい羽状綱文が施される。口縁部は大ぶりな波状を呈するもの（187、188）と、断面形が鶴卵状を呈する大ぶりな突起（180）がつくものの2種がある。この類の出土量は少ない。

・第8類土器（46、190～196）

頸部に無文帶によって区画された、幅広の繩文帶や集合沈線帶（194）に垂下する、蛇行する沈線を持つもので、やや内湾する深鉢と、小型の碗（46）や大ぶりな壺（195）などの器形がある。出土量は少ない。

・第9類土器（47～49、197～233）

頸部の繩文帶に数条の沈線を巡らせたものに、垂下する蛇行する沈線を持つものである。一部には沈線間を垂直に区切るだけ（232）の構成もある。個別的な構成は第8類土器に似るが、沈線間は狭くなっている。口縁部の突起は大きい。出土量は多い。

・第10類土器

集合沈線により文様を構成するものであり、鋸齒状の構成（237、238、240～242）をとるものや、刺突との併用（234）などもある。器形は深鉢型であり、口縁部には大ぶりな突起が付く。特殊な器形として壺型になるもの（238、242）もある。出土量は少ない。

・第11類土器 (11、243～248)

細い集合沈線とS字状沈線の組み合わせ (243～247) と、ボタン状貼付 (248) により文様を構成するもので、器形は壺型となる。おそらくは注口土器となるものと考えられる。出土量は非常に少ない。

・第12類土器 (51、52、249～255)

表面は無文であり、内面に平行する沈線とS状沈線や繩文を併用した文様をもつもの。大ぶりな鉢型の器形となる。

・第13類土器 (43、44、256～284)

地文の繩文を沈線で区画した後、沈線間に磨り消すことによって文様を構成するもの。残された区画された繩文部分に連続した刺突をもつ。深鉢型の器形が多いが、朝顔型に聞く深鉢に台がついたもの (43) などもある。口縁部には數単位の大ぶりな突起を持つ。突起は扁平で断面形が鶏卵状のもの (256～261) 、断面形が筒状になるもの (264) 、円孔をもつものの (264) など、数種類がある。また、繩文地文に刺突のみで構成されるもの (279～284) もある。この類の出土量は多い。

・第14類土器 (17、54、285、286)

連続押圧と磨り消しによる曲線的な繩文を持つものである。深鉢型 (17) と壺型 (54) の器形がある。この類の出土量は少ない。

・第15類土器 (287、288)

陸線により、文様を施したものであり、出土量は少ない。

・第16類土器 (55～78、303～317)

器面が繩文あるいは無文などの装飾となるため、特徴的な文様を持たない土器群を一括した。深鉢型の土器には、頸部で屈曲しながら立ち上がり、口縁部にかけて無文帯を巡らすものが特徴的である (58、59、307、308)。撲糸文 (314) や衝描き (55、303～305) のものも少數ある。壺型土器 (70、71) や底の丸い壺型 (73～77) が少數ある。

・第17類土器 (80～93)

注口土器の注口部分を一括した。

第II群土器 (繩文時代後期中葉から末葉の土器・289、290)

貼り瘤を持つ一群である。出土量は非常に少ない。

第三群土器 (繩文時代晚期の土器・17、291～299)

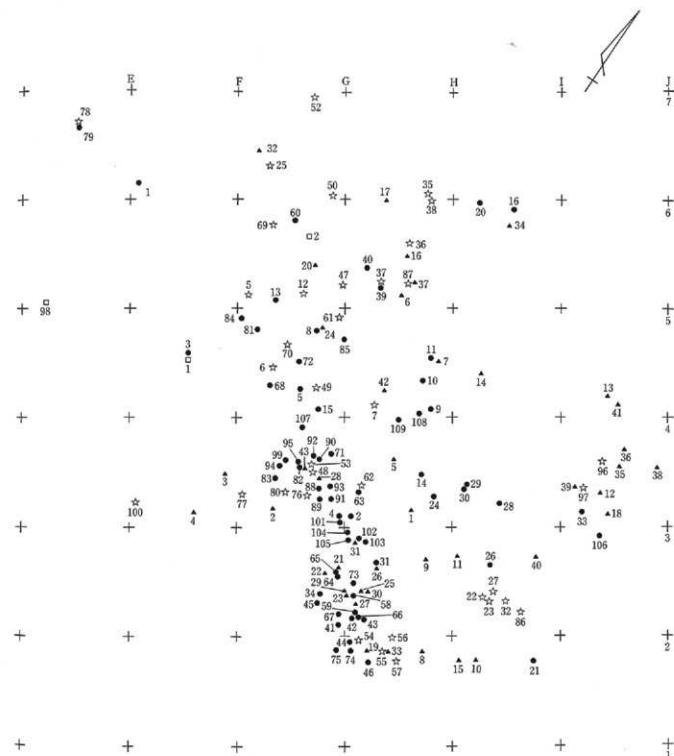
三叉文を持つもの (291、292) やC字文をもつもの (296) 、さらに工字文 (297、298) や変形工字文 (293) などがある。299は注口土器の頸部と思われる。出土数量は非常に少ない。

第四群土器 (弥生時代の土器・301、302)

半裁竹管文により、重層した弧線を横位に描くものであり、2点のみの出土である。

第五群土器 (古代の土器・300)

須恵器破片が1点得られている。

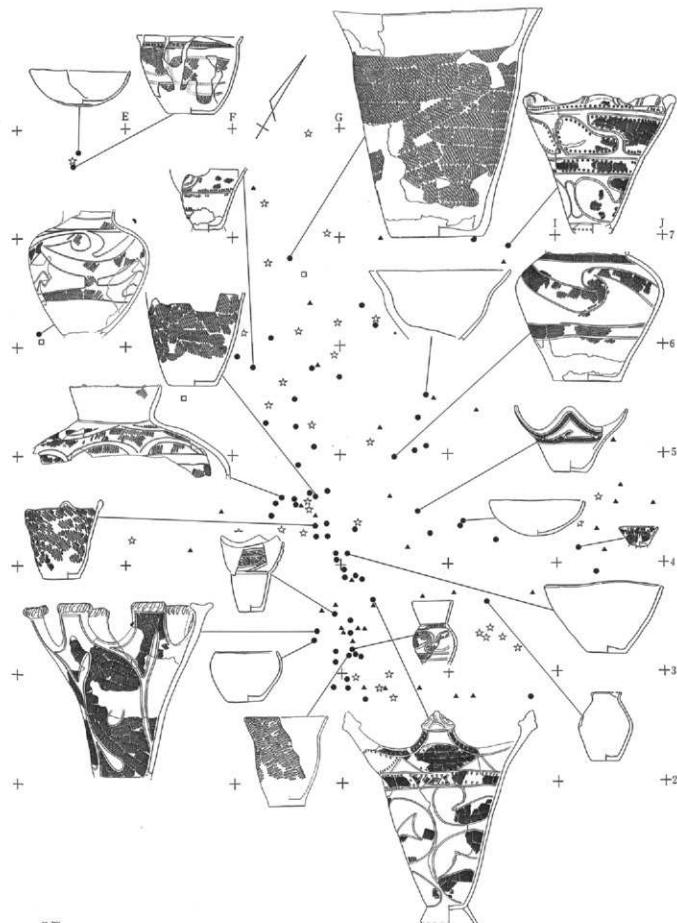


凡例

- 土器(RP)
- 土器・土器品(RP)
- ▲ 石器・石器品(RQ)
- ◎ 自然遺物(RN)

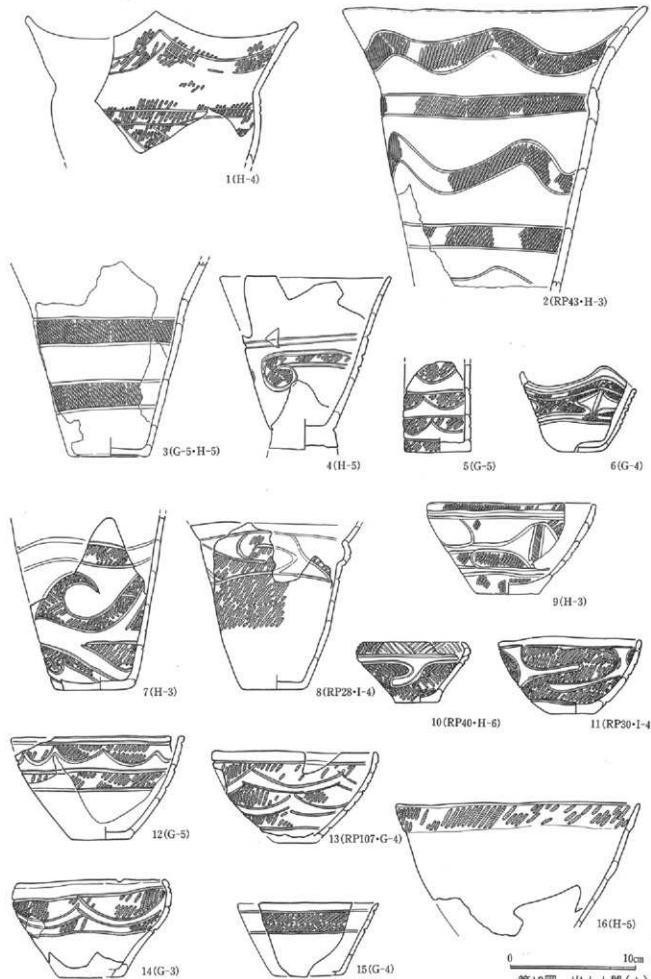
第16図 主要出土遺物 分布図

IV 出土した土器



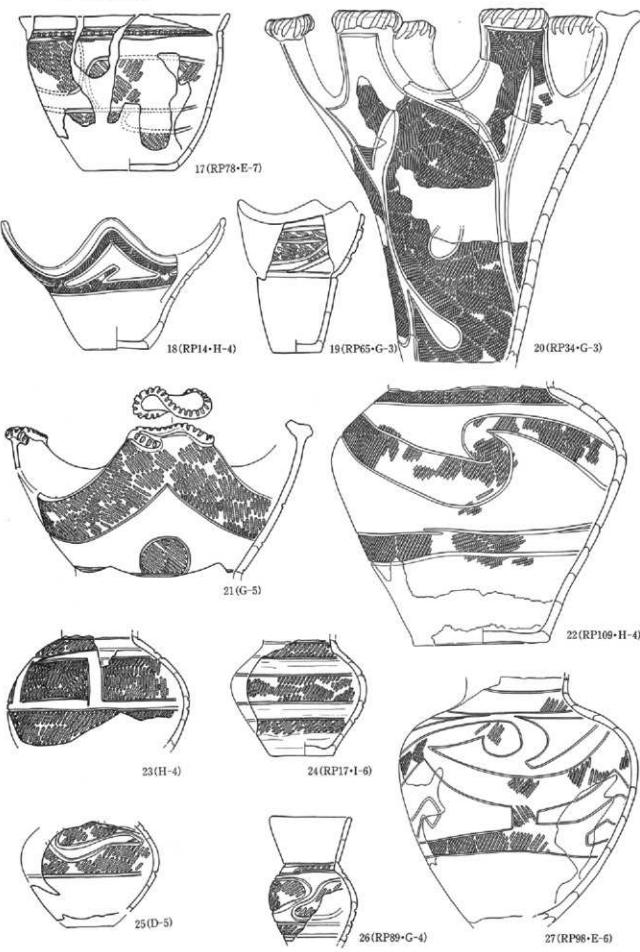
第17図 主要出土土器 分布図

IV 出土した土器



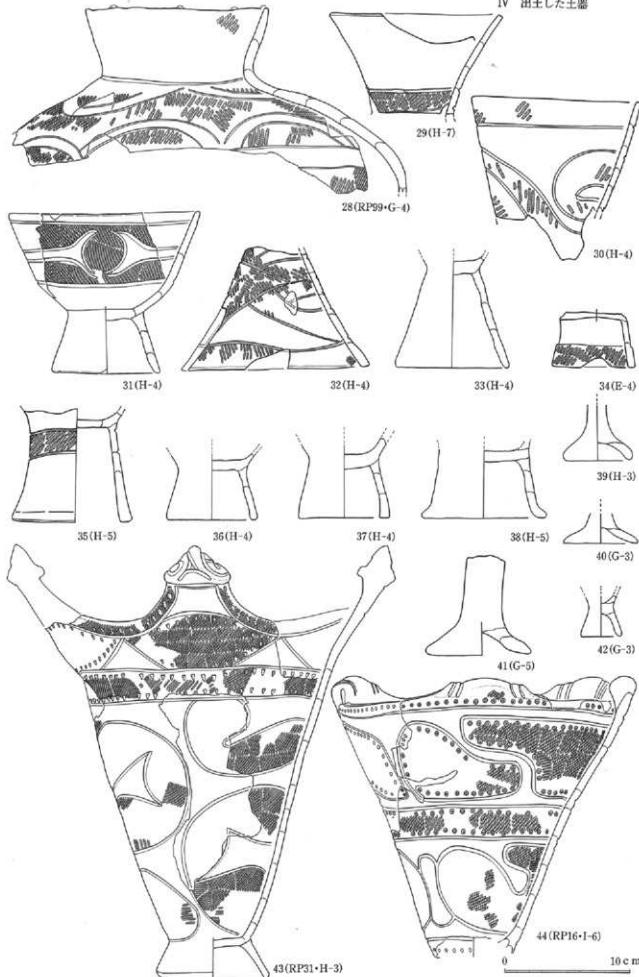
第18図 出土土器(1)

IV 出土した土器



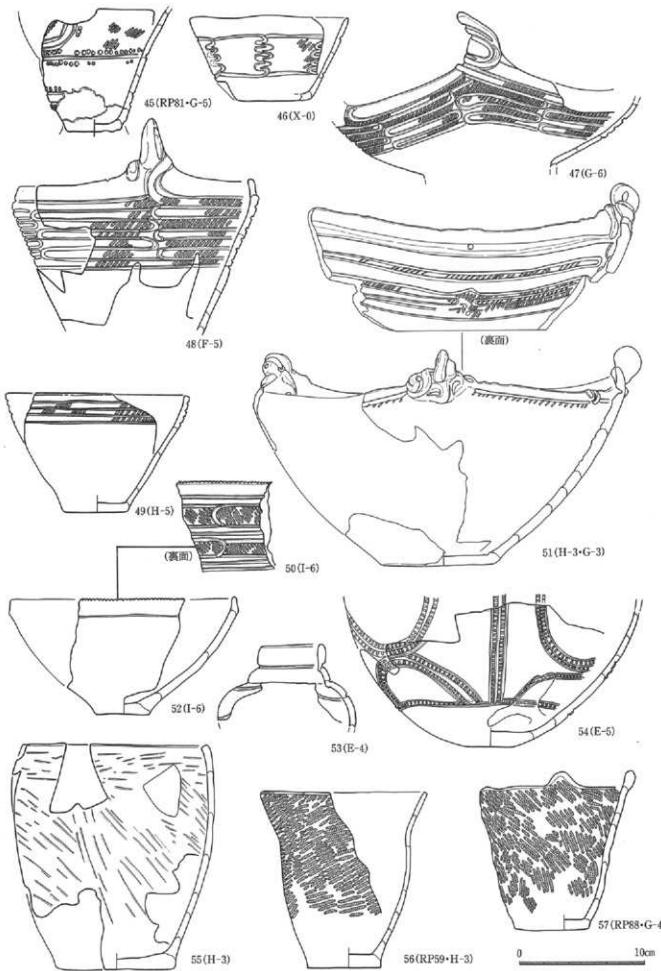
0 10cm
第19図 出土土器(2)

IV 出土した土器



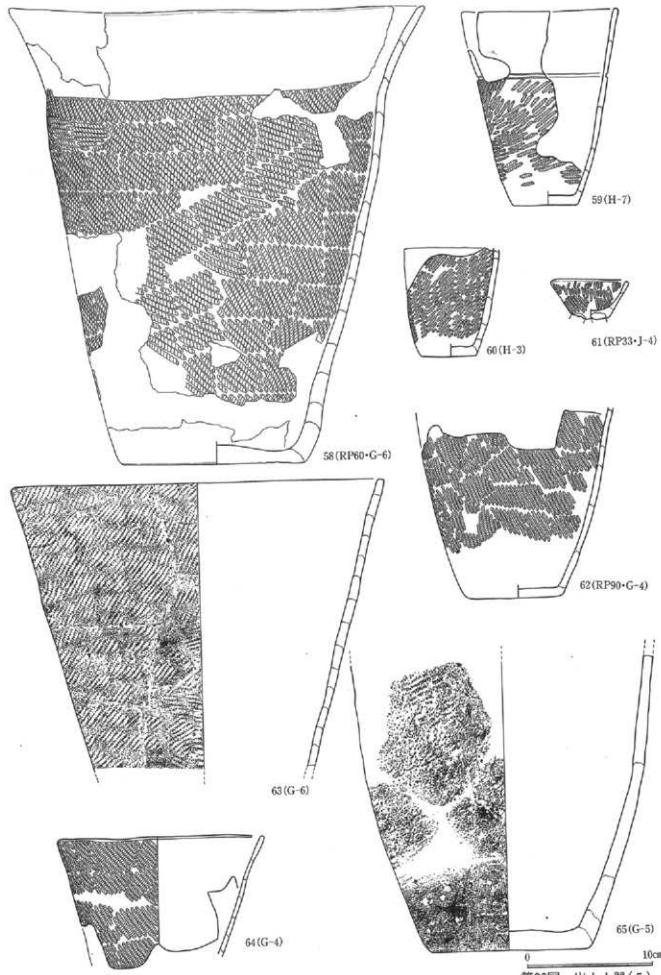
0 10 cm
第20図 出土土器(3)

IV 出土した土器



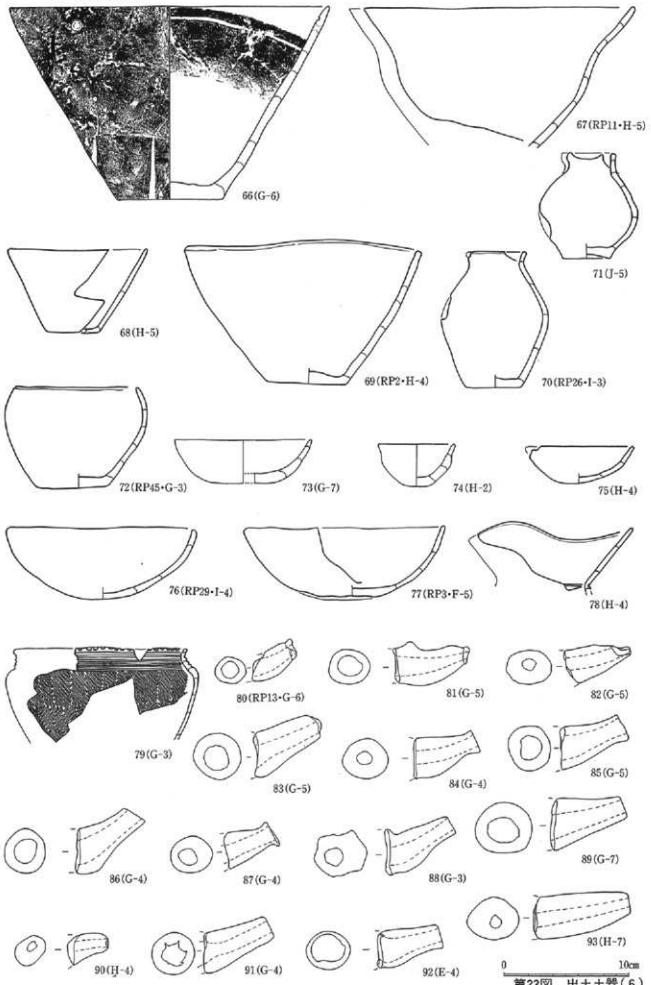
第21図 出土土器(4)

IV 出土した土器



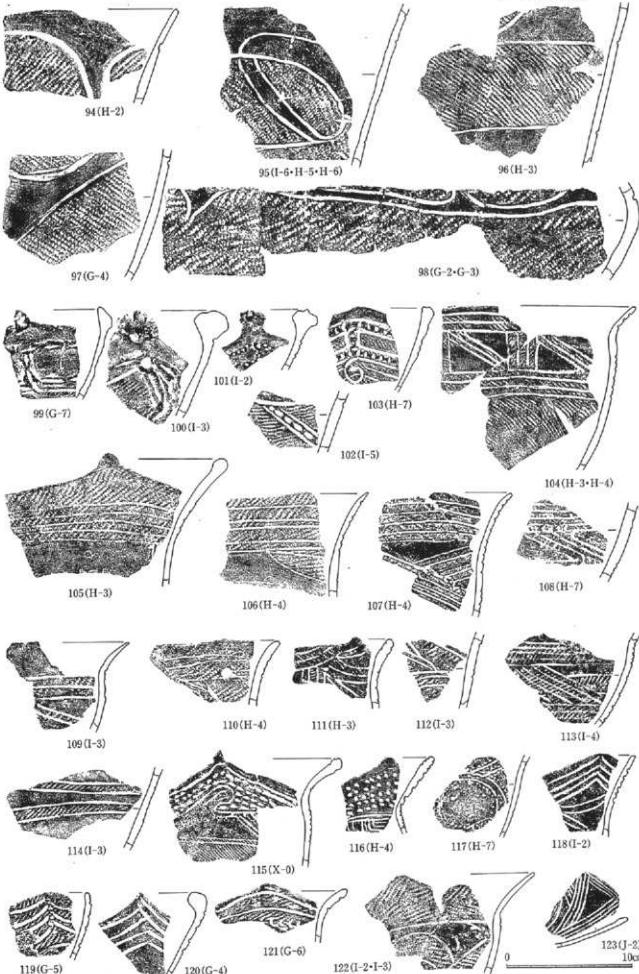
第22図 出土土器(5)

IV 出土した土器



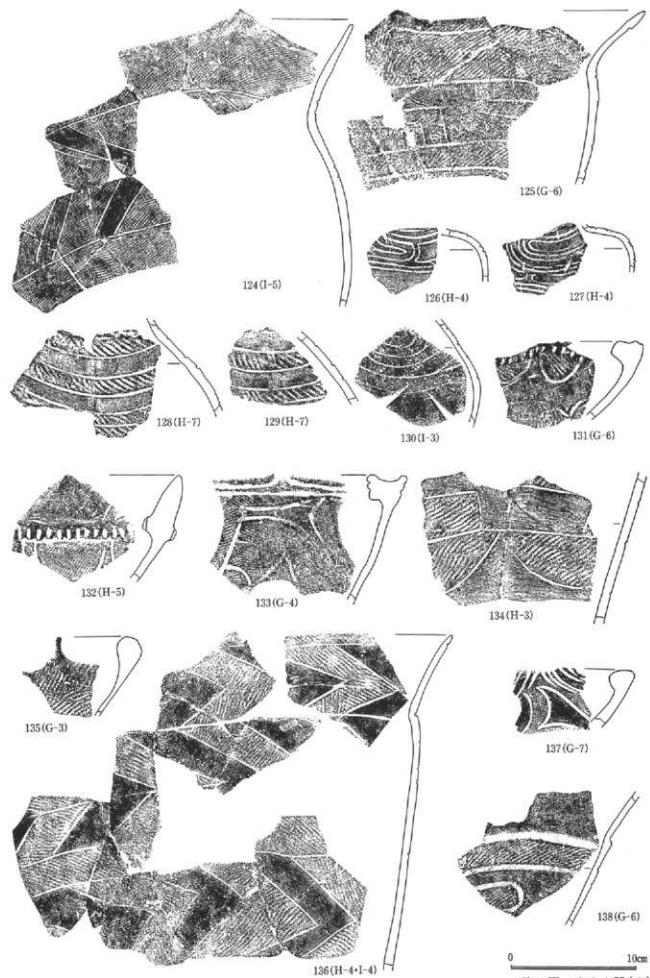
- 34 -

IV 出土した土器

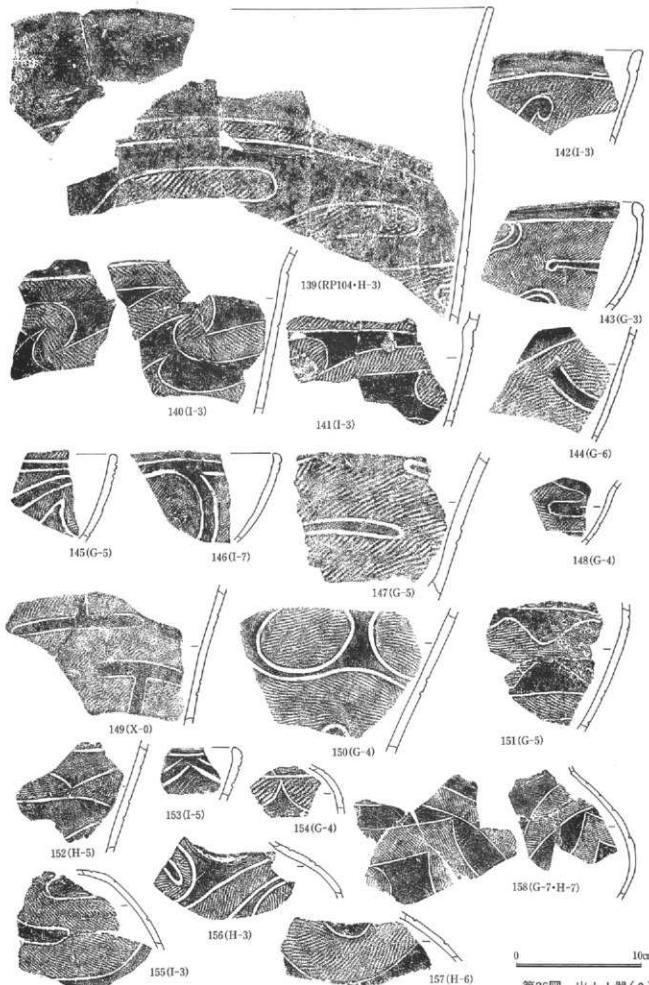


第24図 出土土器(7)

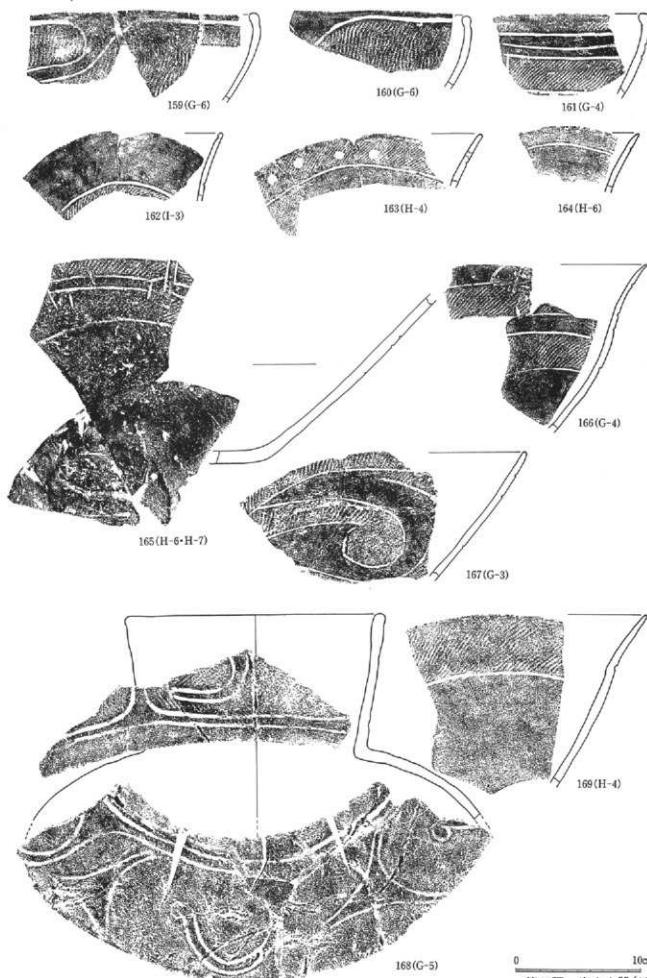
IV 出土した土器



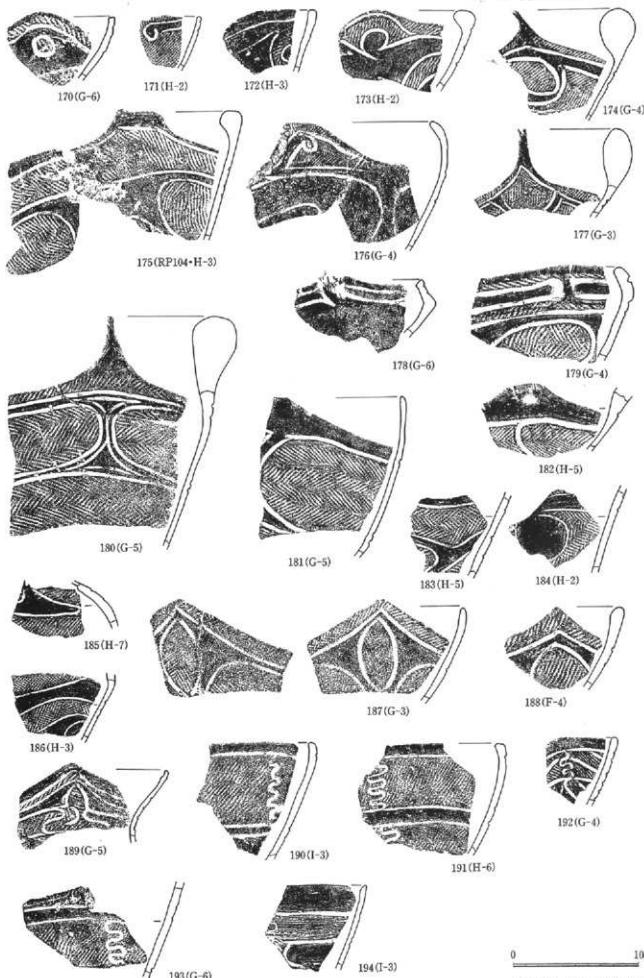
IV 出土した土器



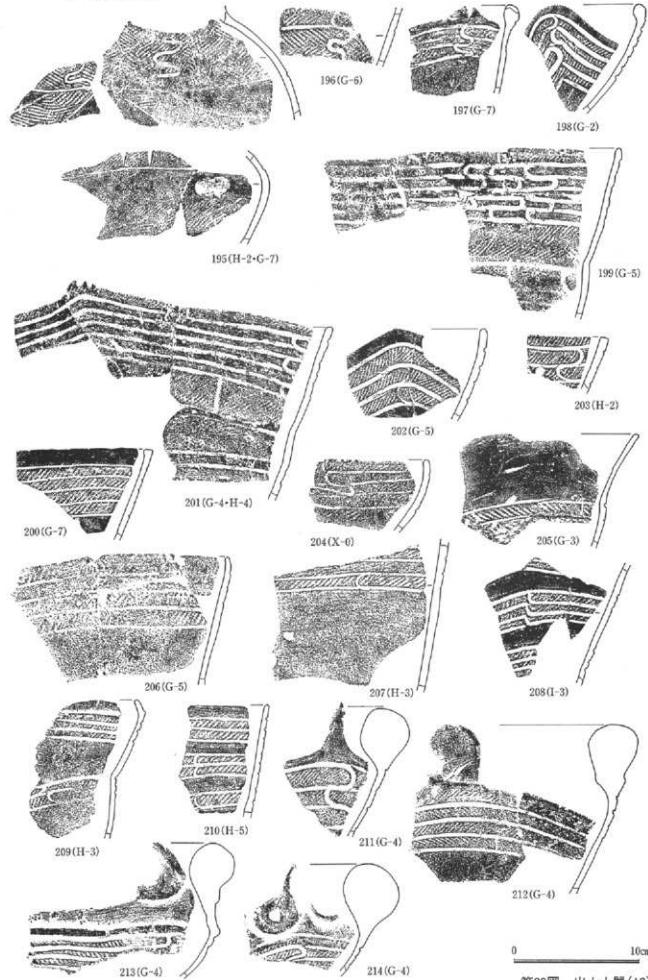
IV 出土した土器



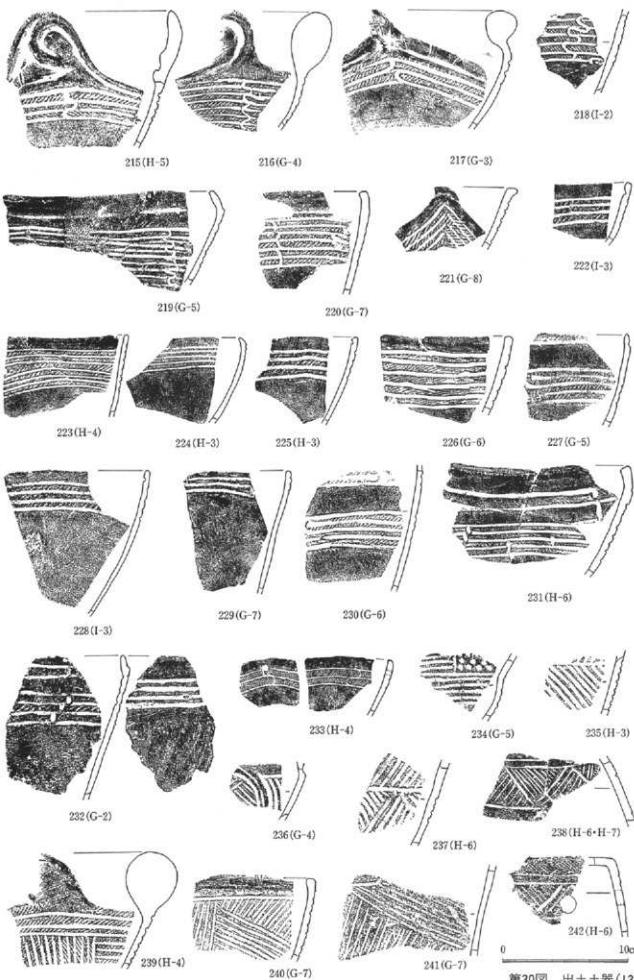
IV 出土した土器



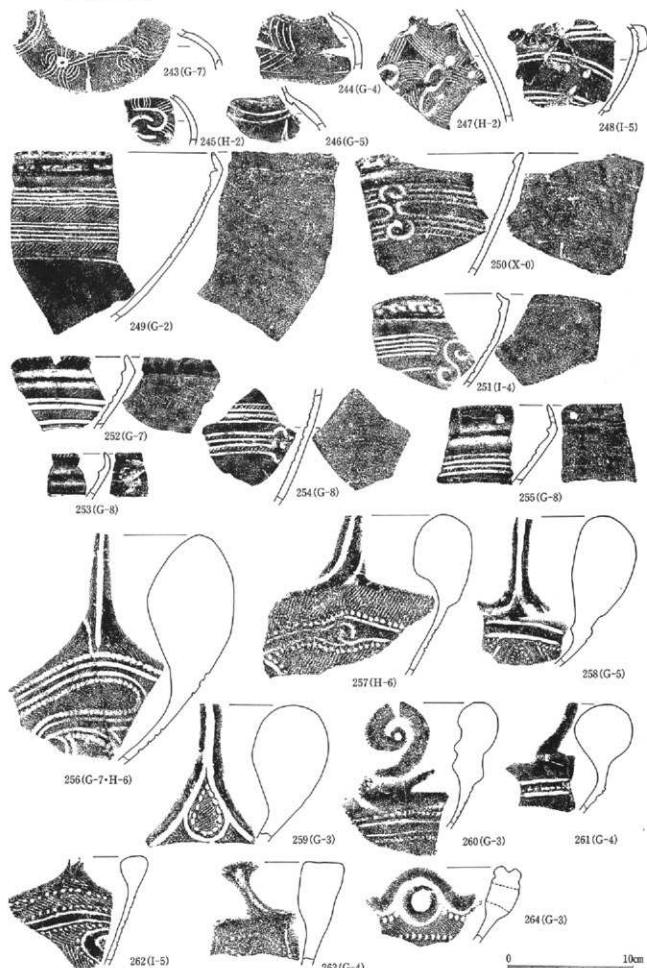
IV 出土した土器



IV 出土した土器

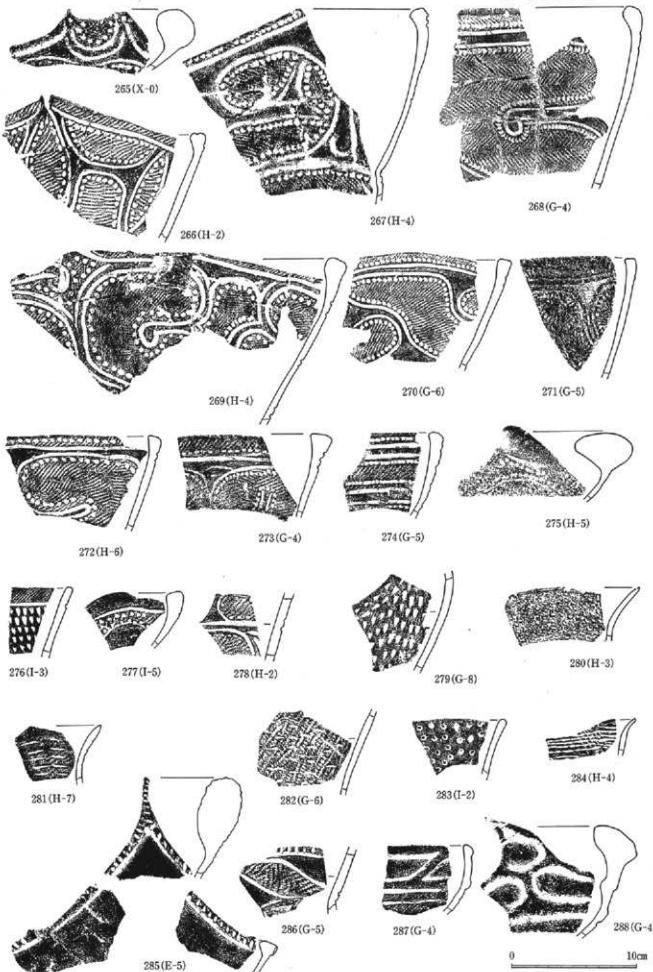


IV 出土した土器



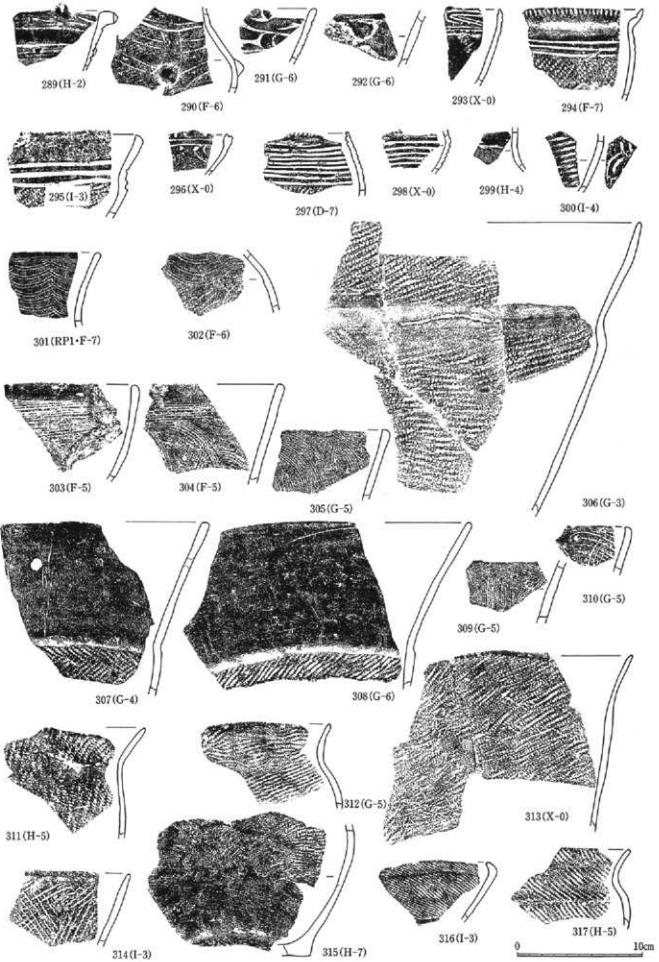
第31図 出土土器(14)

IV 出土した土器



第32図 出土土器(15)

IV 出土した土器



IV 出土した土器

表2 出土土器計測値一覧表(例)

・出土土器について、器高はその高さ、見かけの最大の幅を最大幅、底部の大きさを底径とした。
・大きさで()としてあるものは残存値である。

No	出土区	RPno	大きさ(cm)			押図
			器高	最大幅	底径	
1	H-3	43	22.5	24.5	(11.8)	18-2
2	G-3	34	28.3	30.3	(8.7)	19-20
3	H-3	31	30.0	29.8	9.0	20-43
4	G-6	—	15.6	25.0	8.5	23-66
5	G-4	—	9.6	16.8	(10.3)	22-66
6	G-5	85	10.0	15.8	6.0	—
7	I-6	16	22.5	23.3	5.9	20-44
8	G-4	99	14.5	31.3	—	20-28
9	H-3	—	16.2	32.0	9.5	21-51
10	G-6	60	36.3	33.1	13.7	22-58
11	H-5	—	10.8	23.5	13.4	19-21
12	H-5	—	9.0	14.2	5.0	21-49
13	H-4	—	3.2	8.7	—	23-75
14	G-3	—	6.7	12.6	5.5	18-14
15	H-5	—	8.8	9.1	(7.5)	—
16	H-7	—	8.3	7.2	(5.7)	—
17	H-3	—	8.4	7.7	4.5	22-60
18	G-3	—	4.0	11.6	3.8	—
19	H-3	—	18.1	13.3	9.8	21-55
20	G-4	90	15.1	14.8	7.8	22-62
21	F-5	—	16.1	19.5	11.0	21-48
22	H-5	—	10.7	14.3	(10.4)	18-16
23	H-3	59	14.1	13.4	5.2	21-56
24	H-3	—	12.7	15.0	8.6	20-31
25	I-4	28	13.0	13.0	5.1	18-8
26	H-7	—	15.1	12.8	5.3	22-59
27	H-5	—	15.6	15.3	6.2	18-3
28	E-6	98	20.5	18.5	(7.0)	19-27
29	H-4	109	21.0	23.3	10.3	19-22
30	F-5	3	5.2	15.2	(6.0)	23-77
31	J-4	33	3.2	6.4	3.0	22-61
32	I-4	29	5.5	15.0	—	23-78
33	G-4	107	7.0	13.0	3.4	18-13
34	G-5	81	9.5	11.8	3.8	21-45
35	I-2	21	5.4	10.5	4.0	—
36	I-3	26	10.6	8.0	4.8	23-70
37	H-4	2	11.3	19.7	6.8	23-69
38	H-3	—	7.3	13.5	5.0	18-9
39	H-4	14	10.7	18.2	5.3	19-18
40	H-5	—	13.5	13.4	5.2	18-4
41	G-4	88	11.2	12.1	6.0	21-57
42	H-4	—	9.5	13.8	(5.0)	20-32
43	G-5	—	7.8	14.0	4.5	18-12
44	H-3	—	13.5	—	9.8	—
45	G-6	—	24.0	—	21-47	91 G-3
46	E-5	—	9.5	19.0	5.2	21-54

第33図 出土土器(16)

V 出土した土偶と土製品

今回の渡戸遺跡の調査では、土偶55点（図示可能な個体は49個）、スタンプ状土製品1点、土版3点、土錐1点、土製円盤139点が出土した。出土はすべてG・H—2～8グリッドを主体とする、遺物施設場からである。これら出土した土偶と土製品などの遺物は、共伴した土器群の様相から見たとき、ほぼ同一時期と考えられる。とくに土偶の出土点数の多さは、調査面積に比べた場合特徴的である。さらに、土偶の出土位置を分布図（第34図）として表したときには、特徴的な事柄を見ることがある。

ここで取り上げた遺物については、表3に計測値を一覧表として表しておいたので参考にされたい。

・土偶（第34図、第35～37図、図版16・17）

出土した土偶の時期は、件出土器から縄文時代後期の中葉にほぼ限定できる。最初に全体的な特徴について述べたい。頭部形態では、首が長く突き出すものがある。顔の表現としては、逆三角形に近いものが多い。頭頂部の表現は山型に尖るものや、髪を結ったようなもの、直線状のものなどがある。乳房は大きく円錐状に発達している。沈線や列点で正中線を描く。肩などの体部には列点による文様を持つものが多い。腰部には沈線で連続した鎧甲状の三角形を描く。脚部は直立するものと、屈折するものがある。全体的な身体表現としては、直立するものと、屈折するものとの2種類がある。

アスファルトの付着のある個体も見えるが、破損部分の接着としての使用と、目や口の部分にアスファルトを施すものもあることから、破損部分の接着としての使用以外のものもあることがわかる。

出土した状況としては、いくつかのまとまりを見いだすことができる。さらに土偶の各部分の出土個体数を比較したところ、出土した部分には偏りがあることがわかった。次に個別的な特徴について述べたい。

（頭部形態）

頭部は10個体ほど出土しており（1～10）、約20%である。髪を表現しながら、頭頂部が山型に突出するもの（7、8）。髪を表現しながらも、頭頂部の突出は明瞭ではなく、ターパン状に屈曲するもの（1、2、3、4？、5？、7？、9？、10？）。おそらくハート型の、頭部表現をとるもの（6）。などに類別することができる。首の表現は、垂直に前につき出すもの（6など）と、やや角度をもって突き出すもの（1～5など）がある。刺突による加飾は、首の付け根にまで及ぶものもある（2、4、6）。

目や鼻の表現について見れば、目の表現の場合刺突で表現している（1、2、3、5、6、7、8）ものがほとんどであるが、円形に明瞭に刺突する場合と、あまり明瞭でない場合がある。目の表現が省略されている（9、10）場合もある。鼻は全体的にすっきりと通っており、鼻孔は刺突によって明瞭に表現されている。ただし表現が明らかではない（9、10）ものもある。顔面の表現として沈線を施す場合もある（7、8）。目と口にア

スファルトを施すもの（8）もある。

（体部形態）

肩から胸さらには腹部までの部分を体部とした。この部分は13個体出土しており（11～22、24）、約26%である。いずれも中実である。形状は板状に作られるもの（12、13、14、15、17、18？、19、20）と、やや厚みをもって作られるもの（11、16、21、22）とがある。厚みをもって立体的に作られるものは沈線による正中線をもち（11、22）、下腹部が隆起することから、妊娠状態を表現しているものと考えられる。乳房も大きく表現されている。板状に表現される土偶では、同じく妊娠状態を表現しているものもある（17、19）が、下腹部の隆起は一部（15）を除いて低い傾向がある。4個体に分離して出土したものがある。

加飾は刺突や沈線による。肩から胸に集中してみられるもの（12、14）と、正中線と体側の線に沿って、連続刺突を加えながら、さらに乳房を強調するように詰むもの（15、17）がある。腰部の周囲には連続した鎧甲状の沈線を持つもの（15、20、24）と、腰の回りに連続した刺突を施すもの（19）がある。

（手と足の表現）

肩部を含めた手は13個体出土している（23、25～36）。全体に占める比率は約26%である。文様は刺突または半鋼竹管文（27、28）で、施されているものと、無文となるものの2種がある。これは、体部の状況と共通する。肩部の表現では、やや怒り肩をなし、そのまま垂直に手先に向かって伸びるもの（23、27、28）。なで肩になりながら指先に向かって伸びるもの（25、30、31）がある。手のひらの表現では、腕の先をつまみ出し、押圧を加えながら外反させるもの（26～28、33、34、36）、腕の先端を二頭に分けるものがある（25）。また、腕の先端に丸く沈線を巡らすものもある（35）。足指は明確に作り出されるものがあるものの、手指の表現はいずれも十分ではない。

足は13個体出土している（37～49）。全体に占める比率は約26%である。文様は施されない。おそらく腰部分で消失するものであろう。大ぶりなもの（39）と、小ぶりなもの（43、49）、中間のものとに分かれる。足指の表現は明確でないものが多く、沈線によつて足の先端に垂直な短い刻みを施す、表現が明確なもの（46、47）とがある。

足の傾きに注目したとき、足の位置に対して体の位置が傾くもの（39、40、41？、42、43、44？、49）と、足の位置に対して体の位置が垂直なもの（45～48）とに分けることができる。足の位置に対して体の位置が傾くもののうちには、ひざ頭に胸との接着痕を持つものがある（39、40）。このことから、座った姿勢から、腕を伸ばし、ポーズを取る土偶の存在を考えることができよう。屈折像土偶が含まれているものであろう。

（土偶の姿勢について）

屈折像土偶と考えられるものは破片でしか出土していないが、推定してみたい。屈折像土偶の頭部としては1を考えていい。体部は17に代表されるようなやや屈曲した体部が考えられよう。脚部は同じく39のような形態となる。また腕は、41などから推定すれば、ひ

の上に交叉に重ねて置く場合と、顔の前にひざつけた腕を伸ばし、合掌するなどの姿勢が考えられる。

また、第35図右下に表したような、直立するものもある。

(分布と接合について)

土偶の出土はG・H—2～8グリッドを主体とする、遺物廻叢場からであり、その他の箇所からの出土は、非常に少ない。これを表したのが第34図である。この図を見ると、I—3グリッド、G—4グリッド、H—3グリッドに集中している箇所がある事が分かる。I—3グリッドでは、約1mの範囲から5点の土偶が出土している。G—4グリッドでは、同じく1mの範囲から4点の土偶が出土している。H—3グリッドでは約1.5mの範囲から6点の土偶が出土している。その他はG—5～G—7グリッドにかけてまばらに分布している。I—3グリッド、G—4グリッド、H—3グリッドの出土土偶のうち、RP2とRP55は接合する（第35図右下）。時期的にも近接している可能性を伺わせる。また、同一個体と思われる土偶もある（図版17、上4点）。これらは接合はしないものの、胎土と文様の状態が同じである。いずれも近接した位置にある。

さて、各部分の個体数について先程述べたが、単純に完形土偶が破壊されたとすると、頭部（1）、体部（1）、手（2）、足（2）となるはずであるが、出土土偶の各部位の比率はばらつきがある。また、同一個体であるにもかかわらず接合するものは非常に少ない。このことは、廻叢にかかるときには、全身を捨てるとはしないとか、捨てる箇所を決めるなどという行為があったことを想定できる。なお、捨場はさらに東側に伸びるためここでの調査も行われたときには、さらに廻叢に関する事実が得られるものであろう。

・スタンプ状土製品（50）

1点得られている。つまみを作り出し、中央付近に貫通孔をもつ。連続した山状の文様が、梢円形をなす底部に刺み込まれている。

・土版（51、52、54）

3点得られている。表面に溝巻きを持ち底面には、山型に沈線を組むもの（51）。星形の文様をもつもの（52）。大ぶりで薄く、表面には網目状の山型文をもち、裏面には文様をもたないもの（54）がある。

・土鐘（53）

1点得られている。梢円形の形状をなし、十字に沈線が廻るものである。

・土製円板（55～139）

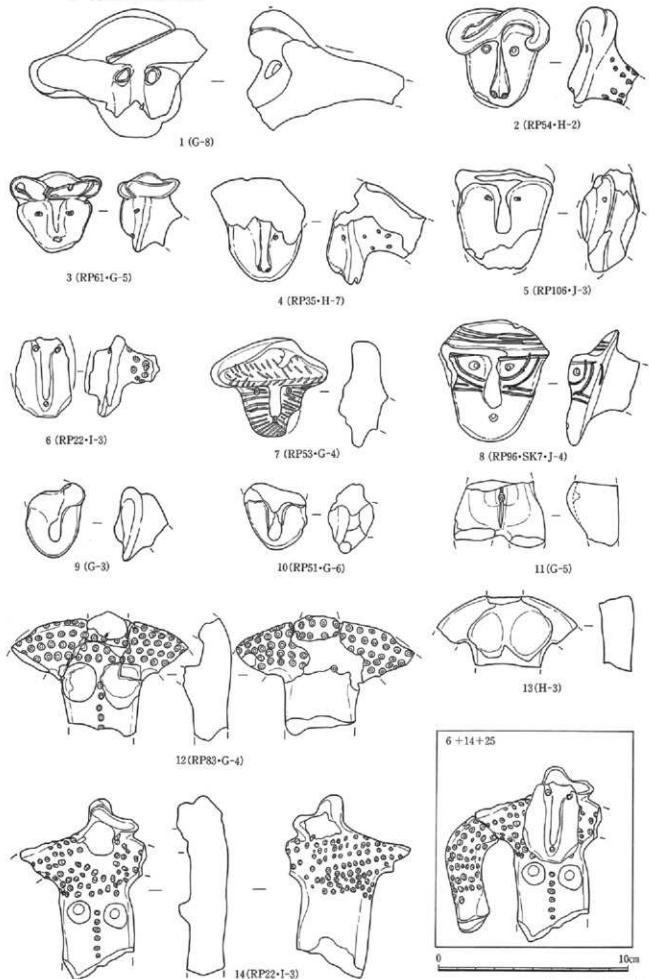
35点得られている。土器の体部や底部を成形し円形にしたものである。大きさには、6cm内外のもの（55～62）、4cm内外のもの（63～82）、3cm内外のもの（83～114）、2cm内外のもの（115～139）がある。



凡例
■ 土偶
● 土版・土製品
▲ 石器・石製品
□ 自然遺物

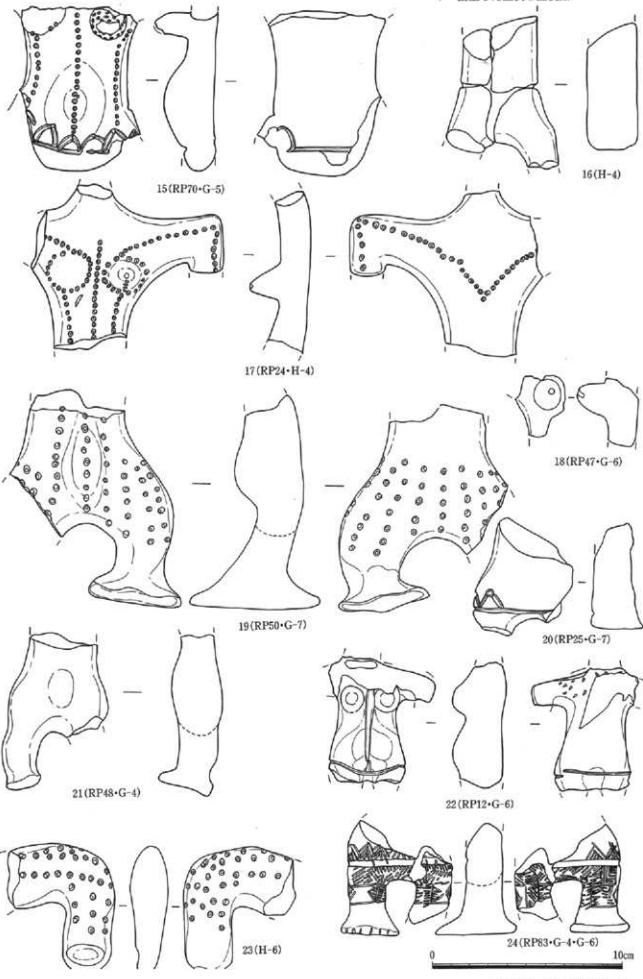
第34図 土偶分布図

V 出土した土偶と土製品

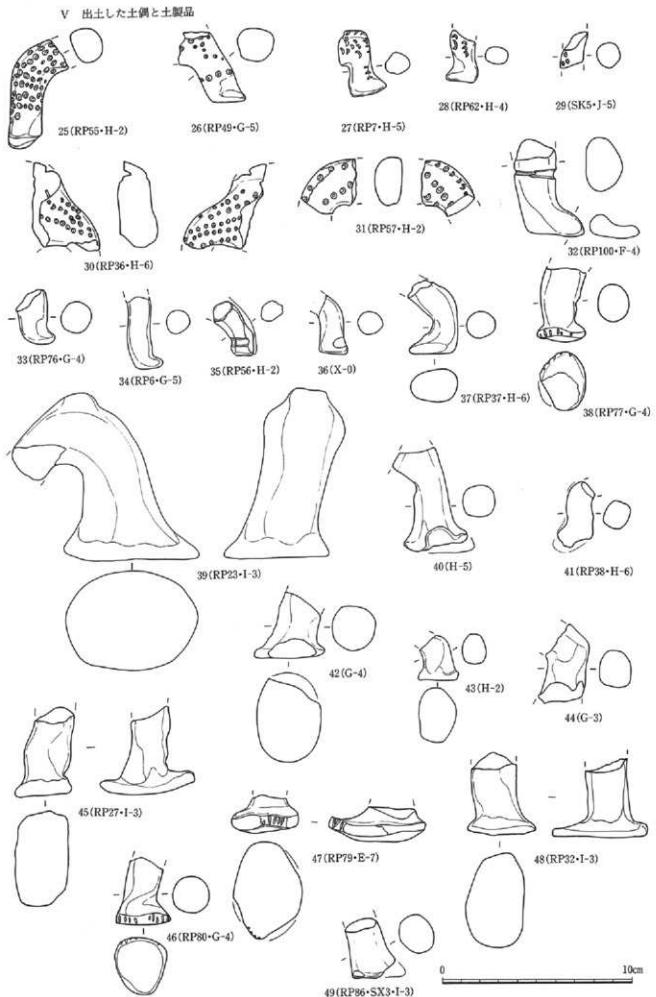


第35図 出土土偶(1)

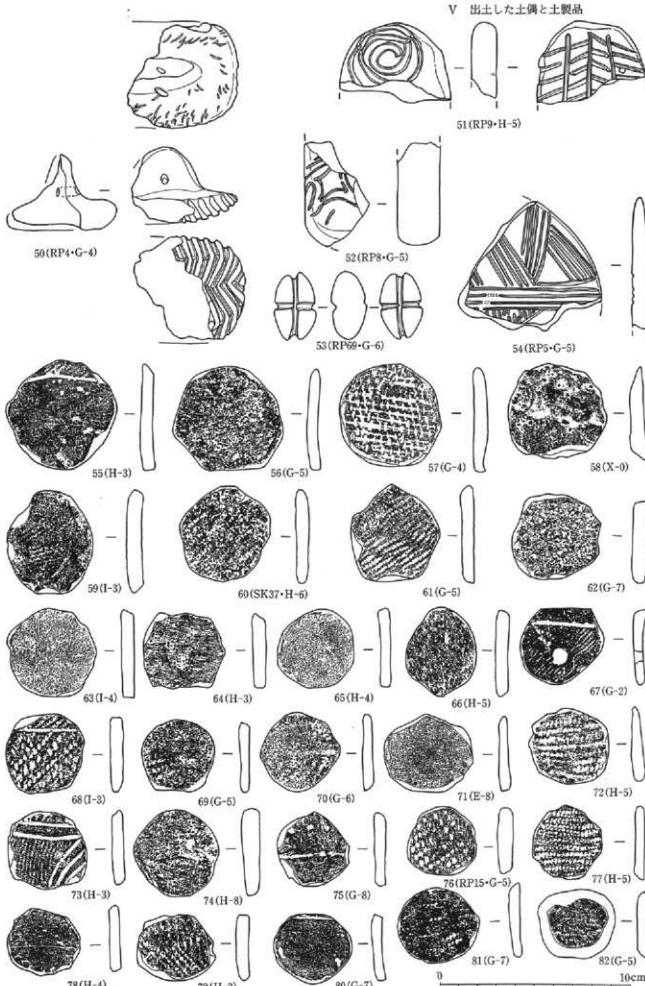
V 出土した土偶と土製品



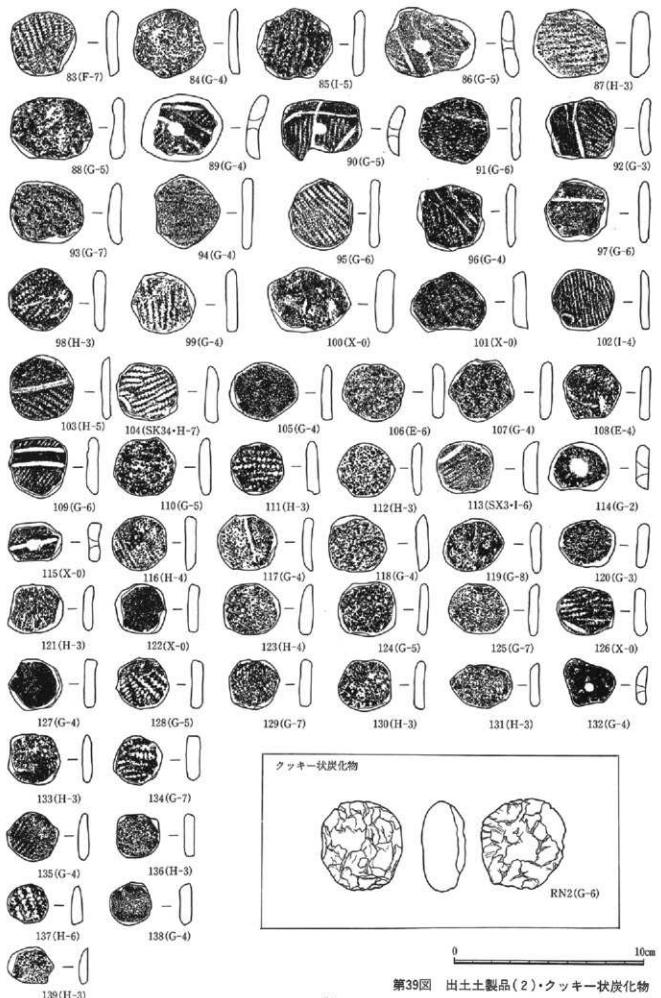
第36図 出土土偶(2)



第37図 出出土偶(3)



第38図 出出土製品(1)



第39図 出土土製品(2)・クッキー状炭化物

表3 土偶・土製品計測値一覧表(凡例)

・土偶についてのみ部位の注記を設けたが、①は頭部、②は体部、③は手、④は脚を表す。
・長さはその全長、みかげの幅を幅、最大厚を厚さとした。前()とした数字は残存値を表す。

No.	種類	出土区	大さき (cm)	重量(g)	解説	参考
1	土偶	G-8 (5)	(6.0)	0.00	H9.7-26-1	
2	土偶	-	1.3	(1.0)	0.05	31.2-26-6 (RP11+RP53)同-1
3	土偶	J-4	6.5	3.7	(5.0) 59.3-28-8 SSK T296	
4	土偶	H-2	5.3	4.5	51.7-25-2 RP54	
5	土偶	J-3	6.0	0.3	(5.1) 56.9-35-5 RP106	
6	土偶	H-7	5.7	4.9	52.2-24-5 RP55	
7	土偶	G-5	4.1	4.3	(3.1) 38.8-35-3 (RP11+RP12)同-2	
8	土偶	G-4	5.4	6.2	(2.5) 38.5-35-7 (RP52+RP5-G-4)同-2	
9	土偶	G-3	4.0	3.7	(2.0) 19.0-35-9 (F-2+H-3)同-1	
10	土偶	G-2	4.0	3.7	(2.0) 19.0-35-9 (F-2+H-3)同-2	
11	土偶	G-6 (6)	6.7	4.0	(6.7) 77.5-36-21 (RP11+RP11)同-1	
12	土偶	G-5	4.8	6.5	(5.4) 14.1-36-21 RP79	
13	土偶	G-4	5.0	6.0	55.4-36-21 RP45	
14	土偶	H-4	5.0	6.0	59.3-36-16 RP46	
15	土偶	G-7 (P)	10.0	2.2	3.5 23.6-36-19 RP78	
16	土偶	G-4 (P)	8.4	2.0	(2.1) 51.0-35-14 RP55+RP22同-2	
17	土偶	-	1.3	(0.9)	6.0	2.6 9.5-35-14 (RP52+RP55)同-2
18	土偶	H-9	4.0	5.9	(3.0) 33.3-36-17 RP24	
19	土偶	H-3	4.0	3.7	(2.0) 19.0-35-9 (F-2+H-3)同-1	
20	土偶	G-4 (P)	8.4	2.0	(2.1) 51.0-35-14 RP25	
21	土偶	G-5 (P)	8.0	2.0	(2.0) 50.0-35-11 RP26	
22	土偶	G-6	4.0	2.8	(2.0) 17.4-36-18 RP47	
23	土偶	H-2 (P)	16.0	5.6	(4.0) 55.1-36-24 (RP5-G-6+RP52)同-2	
24	土偶	F-4 (P)	5.1	3.6	3.0 40.3-37-32 RP100	
25	土偶	H-6	6.9	3.7	2.0 60.1-36-23 SK57 RP87	
26	土偶	H-6	6.9	3.7	(2.1) 23.2-37-30 RP55+RP22同-2	
27	土偶	H-2 (P)	16.0	9.0	1.9 22.6-37-35 (RP55+RP22)同-2	
28	土偶	H-2 (P)	16.0	9.0	1.9 18.0-37-34 RP57	
29	土偶	A-2	4.0	3.0	(1.9) 19.0-35-14 RP58	
30	土偶	H-4 (P)	7.0	4.1	4.7 23-39 RP78	
31	土偶	H-5 (P)	8.0	4.5	4.5 23-39 RP79	
32	土偶	X-0	3.0	1.1	1.3 4.9-36-26 RP101	
33	土偶	H-6 (P)	12.0	3.0	8.4 37-41 RP88	
34	土偶	G-4 (P)	28.0	1.0	1.7 7.1-37-33 RP59	
35	土偶	G-5 (P)	33.0	1.0	1.6 8.1-37-34 RP6	
36	土偶	H-2 (P)	23.0	1.1	1.4 6.0-37-35 RP60	
37	土偶	J-5 (P)	11.0	1.0	(1.0) 4.3-37-29 SK 5 F	
38	土偶	J-3 (P)	10.0	0.9	5.6 21.0-37-34 RP61	
39	土偶	Z-2	4.0	2.0	2.0 15.0-37-34 RP62	
40	土偶	J-1 (P)	4.0	3.4	2.0 15.6-37-34 RP63	
41	土偶	G-4 (P)	3.0	3.0	2.0 18.4-36-26 RP80	
42	土偶	J-7	2.0	0.0	2.0 22.4-37-42 RP79	
43	土偶	G-4 (P)	3.0	3.0	3.7 22.7-37-42 F2	
44	土偶	G-3 (P)	1.3	0.7	(2.0) 20.0-37-44 RP78	
45	土偶	G-4 (P)	3.0	2.0	3.1 19.7-37-38 RP77	
46	土偶	H-5 (P)	5.0	3.0	(2.0) 19.7-37-40 RP78	
47	土偶	H-6	3.0	0.9	1.6 14.9-37-37 RP78	
48	土偶	J-3 (P)	3.0	0.7	1.0 15.0-37-37 SK 3 F	
49	土偶	G-4 (P)	3.0	0.7	1.0 15.0-37-37 RP79	
50	土偶	頭	4.0	0.0	1.0 14.0-37-36 RP80	
51	土偶	G-5	6.0	1.1	1.0 16.1-36-54 RP5	
52	土偶	G-5 (P)	5.0	1.1	1.0 14.0-36-54 RP8	
53	土偶	G-4 (P)	6.0	1.1	2.3 14.0-36-52 RP4	
54	土偶	G-6	3.6	2.2	1.8 14.8-36-53 RP69	
55	円筒状土器	H-3	5.7	5.8	0.7 27.5-38-55	
56	土偶	G-5	5.4	5.7	0.6 22.9-36-56	
57	土偶	G-4	5.5	5.3	0.8 25.7-38-57	
58	土偶	X-0	4.9	4.3	0.7 22.0-38-58	
59	土偶	G-4	5.4	4.8	0.7 22.0-38-59	
60	土偶	H-6	5.0	4.7	0.7 17.0-38-60 SK27 F	
61	土偶	G-5	5.1	4.7	0.7 19.3-39-61	
62	土偶	G-7	4.4	4.3	0.8 18.0-38-62 F2	
63	土偶	J-4	4.6	4.5	0.8 18.0-38-63	
64	土偶	H-3	4.0	4.1	0.8 16.9-38-64	
65	土偶	H-4	4.2	4.0	0.6 15.1-38-65	
66	土偶	G-5	4.6	3.7	0.7 11.8-38-66	
67	土偶	G-2	4.1	4.3	0.5 9.3-38-67	
68	土偶	J-1	4.0	4.9	0.7 14.8-38-68	
69	土偶	G-3	4.0	4.9	0.7 14.8-38-69	
70	土偶	G-6	4.8	4.1	0.6 11.5-38-70	
71	土偶	E-8	4.8	4.5	0.5 10.1-38-71	
72	円筒状土器	H-5	3.5	3.0	0.6 14.0-38-72	
73	土偶	H-2	3.5	3.0	0.6 14.0-38-73	
74	土偶	H-8	4.6	4.4	1.0 22.7-38-74	
75	土偶	G-8	3.9	3.8	0.7 11.8-38-75	
76	土偶	G-5	3.6	3.5	0.8 11.1-38-76 RP18	
77	土偶	H-5	3.9	3.5	0.8 10.4-38-77	
78	土偶	H-4	3.5	3.7	0.6 10.4-38-78	
79	土偶	H-3	3.4	4.0	0.7 11.8-38-79	
80	土偶	G-7	3.7	4.1	0.6 10.3-38-80	
81	土偶	G-5	3.8	3.8	0.6 10.3-38-81	
82	土偶	G-5	3.6	3.6	0.6 10.0-38-82	
83	土偶	F-7	3.4	3.2	0.6 11.5-38-83 F2	
84	土偶	G-4	3.5	3.6	0.5 8.5-39-84	
85	土偶	I-5	3.7	4.0	0.7 10.7-39-85	
86	土偶	G-5	3.5	4.7	0.6 10.7-39-86	
87	土偶	H-3	3.6	3.3	0.1 10.5-39-87	
88	土偶	G-5	3.3	4.3	0.6 9.6-39-88 F2	
89	土偶	G-4	3.5	4.2	0.6 10.6-39-89	
90	土偶	G-5	2.7	4.2	0.6 10.6-39-90	
91	土偶	G-6	3.5	4.2	0.5 8.5-39-91	
92	土偶	G-3	3.0	4.6	0.5 7.1-39-92	
93	土偶	G-7	3.2	3.8	0.6 9.2-39-93	
94	土偶	G-4	3.8	3.4	0.6 8.5-39-94	
95	土偶	G-6	3.7	3.4	0.5 7.8-39-95	
96	土偶	G-6	3.2	3.3	0.5 7.6-39-96	
97	土偶	G-6	3.2	3.3	0.6 7.5-39-97 F2	
98	土偶	F-3	3.2	3.3	0.6 7.5-39-98	
99	土偶	G-4	3.1	3.4	0.6 8.0-39-99 F2	
100	土偶	X-0	3.4	3.4	0.6 8.0-39-100	
101	土偶	G-4	2.9	3.6	0.6 11.5-39-101	
102	土偶	I-4	3.2	3.3	0.6 6.5-39-102	
103	土偶	H-5	3.4	3.3	0.5 6.5-39-103	
104	土偶	H-7	2.9	3.2	0.6 8.1-39-104 SK3 F	
105	土偶	G-5	3.0	3.6	0.5 6.5-39-105	
106	土偶	E-6	3.0	3.2	0.7 7.8-39-106	
107	土偶	G-4	3.1	3.4	0.7 6.3-39-107	
108	土偶	E-4	2.8	3.6	0.5 5.8-39-108	
109	土偶	G-5	2.8	3.6	0.5 5.8-39-109	
110	土偶	G-6	2.7	3.6	0.6 6.6-39-110 F2	
111	土偶	H-3	2.7	2.8	0.6 6.1-39-111	
112	土偶	H-3	2.7	2.9	0.5 5.2-39-112	
113	土偶	I-6	2.7	3.0	0.7 7.8-39-113 SK 3 F	
114	土偶	G-2	2.4	3.0	0.7 4.8-39-114	
115	土偶	X-0	1.9	2.8	0.6 4.1-39-115	
116	土偶	H-4	2.9	2.9	0.6 6.0-39-116	
117	土偶	G-4	2.3	3.2	0.6 6.0-39-117	
118	土偶	G-4	2.8	3.0	0.6 5.1-39-118	
119	土偶	G-7	2.7	3.1	0.6 4.5-39-119	
120	土偶	G-5	2.5	3.0	0.6 4.5-39-120	
121	土偶	H-3	2.5	2.7	0.5 6.3-39-121	
122	土偶	X-0	2.6	2.6	0.5 5.5-39-122	
123	土偶	H-4	2.7	2.9	0.5 6.5-39-123	
124	土偶	G-5	2.3	3.1	0.5 5.3-39-124 F2	
125	土偶	G-7	2.6	3.1	0.5 5.3-39-125	
126	土偶	X-0	2.5	3.0	0.6 6.5-39-126	
127	土偶	G-4	2.6	2.8	0.6 5.1-39-127	
128	土偶	G-5	2.6	2.7	0.6 6.5-39-128	
129	土偶	G-6	2.6	2.8	0.6 5.5-39-129	
130	土偶	G-5	2.6	2.8	0.6 5.5-39-130	
131	土偶	H-3	2.3	2.5	0.5 6.3-39-131	
132	土偶	G-4	2.0	2.6	0.5 5.5-39-132	
133	土偶	H-3	2.6	2.7	0.5 4.8-39-133	
134	土偶	G-7	2.6	2.5	0.5 5.7-39-134	
135	土偶	G-4	2.6	2.8	0.5 4.8-39-135	
136	土偶	H-3	2.3	2.3	0.5 6.3-39-136	
137	土偶	H-6	2.0	2.1	0.5 3.1-39-137	
138	土偶	G-4	2.5	2.2	0.5 3.1-39-138	
139	土偶	G-5	2.0	2.1	0.5 3.1-39-139	
140	円筒状土器	H-3	2.2	2.3	0.7 3.8-40-140 RQ2?	
141	土偶	H-3	2.3	3.4	0.9 11.7-40-141	

VII 出土した石器と石製品

出土した石器と石製品（第40図～第46図）は、土器に比べると非常に少ない。これらは主として、G・H—2～8グリッドを中心とする、遺物発掘場から得られている。

出土した石器と石製品の種類は、石鎚・石槍・石槍・石錐・石匙・不定形石器・石箒・磨製石斧・磨石・凹石・砥石・石皿・石棒、である。このうち石匙・不定形石器・磨製石斧・磨石・凹石・砥石・石皿が多い。石材は石鎚・石槍・石錐・石匙・不定形石器・石箒には硬質頁岩が多用される。磨製石斧の石材は蛇紋岩と粘板岩がある。磨石・凹石・石皿・石棒には硬質の安山岩と砂岩が選ばれている。砥石にはやや軟質の凝灰岩質の砂岩が選ばれている。

その他の石材としては、メノウ・石英・黒曜石などが少數あるに過ぎない。これらの石材の中では蛇紋岩や黒曜石は、渡戸遺跡の周辺では産出しないものであるため、交易などによって入手していたものであろう。特に黒曜石は2点のみの出土である。

出土した石器と石製品の機械を見てみると、砥石が6点出土し、発掘面積に比較して多い傾向にある。石皿もまた多い。このうち89や93として提示した石皿は、離れて出土した個体同士が接合したものである。特に93ではH—6グリッドから出土したRQ17と、G—3グリッドから出土したRQ22が接合したもので、両者は約20m離れて接合した。渡戸遺跡での最も長い距離での接合した事例となった。その他の資料では接合はほとんどなかつた、また88のように据えられたような状態で、出土した石皿もある。

・石鎚（1～18）

石鎚はここに18点図示することができた。石材が頁岩が主体であり、一部にメノウや石英などが使用されている。大きさは全体的に小さい。形態は、茎のあるもの（1～9）、茎のないもの（16～18）、さらには茎の状態がはっきりしないもの（7～13）や、全体がアーモンド型をなすもの（14～16）がある。アーモンド型をなすもの以外は概して小さい。

特徴的な石鎚として、石英製の長脚鎚（18）や、メノウ製の石鎚（2）がある。着柄のためと思われる、アスファルトの付着が認められるもの（17、図版18左下）がある。

・石槍（20）

石槍は1点のみの出土した。硬質頁岩製であり、先端と基部が欠損している。

・石錐（21～31）

桿状（28～31）やT字型（21～24）の形態のものを中心とし、不定形の剥片の先端を錐状に作出したもの（27）、その他（25、26）などがある。27には全面にアスファルト付着の痕跡がある。いずれも頁岩製である。

・石匙（32～49）

石匙は横型（32～37）のものと、縦型（38～49）の2種類がある。大きさは5～6cmのものが多い。丁寧な剝離によって作製されているものと、剥片の先端に両側から剝離を加えただけのもの（41～44、47）がある。いずれも頁岩製である。石匙には着柄のためと思

われる、アスファルトの付着が認められる（図版18右下）。機種としては最も多く出土している。

・不定形石器（50～56）

剥片に剝離を加え、一側あるいは両側辺に加工してあるものであるが、定形的な石器でないものをまとめた。石材は硬質頁岩である。

・石箒（57、58）

箕状の形態をし5～6cmの大きさのものである。材質は頁岩製（57）と石英製（58）がある。

・磨製石斧（59～68）

粘板岩製（59、61、62、63、67）と、蛇紋岩製（60、64、65、66、68）のものがある。再使用されているもの（65、66）もみられる。

・円盤状石器（69、70）

材質は凝灰岩質の砂岩である。周囲を打ち欠いた後、全面を磨いている。

・線刻礫（71）

軟質の凝灰岩質砂岩を使用し、細かな線を刻み込んでいる。

・凹石、磨石（72～81）

安山岩質の礫を利用し、一面あるいは両面に、一個から数個の凹みをつけたもの（72、74、75、79～81）と、両面を磨いたもの（73、76～78）である。

・碁石（82～87）

凝灰岩質の砂岩の礫の表面に、条線を刻み込んでいるものである。大ぶりの礫を使用して加工しているもの（82、86、87）と、小さめのもの（83～85）がある。

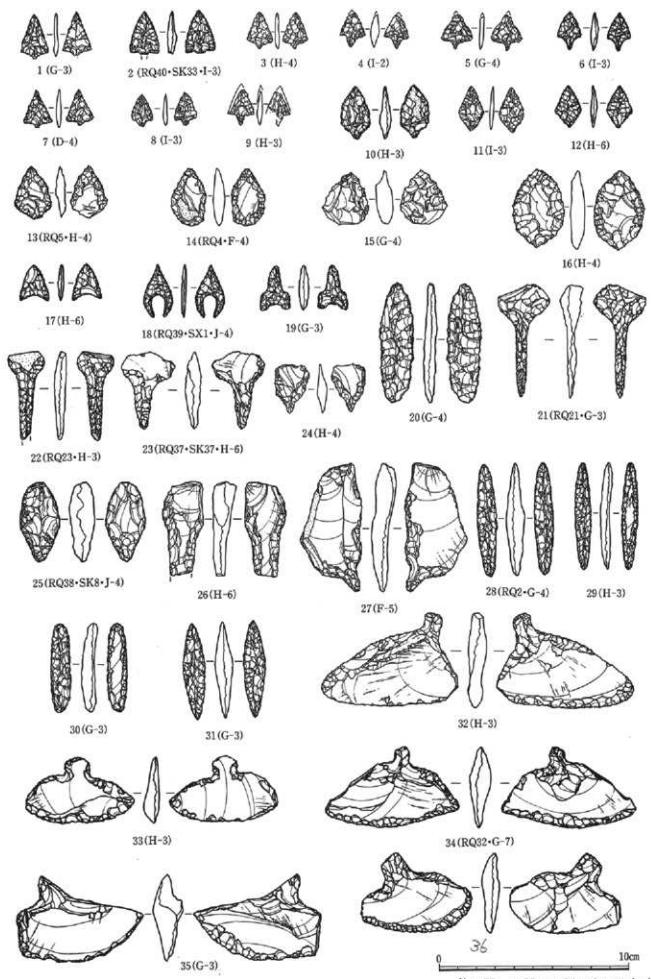
・石皿（88～93）

砂岩（88）や、凝灰岩質（89～93）の石を使用し、中央付近に凹みを施す、周囲には高まりを作り出している。

・石棒（94）

凝灰岩質のものが一点出土している。

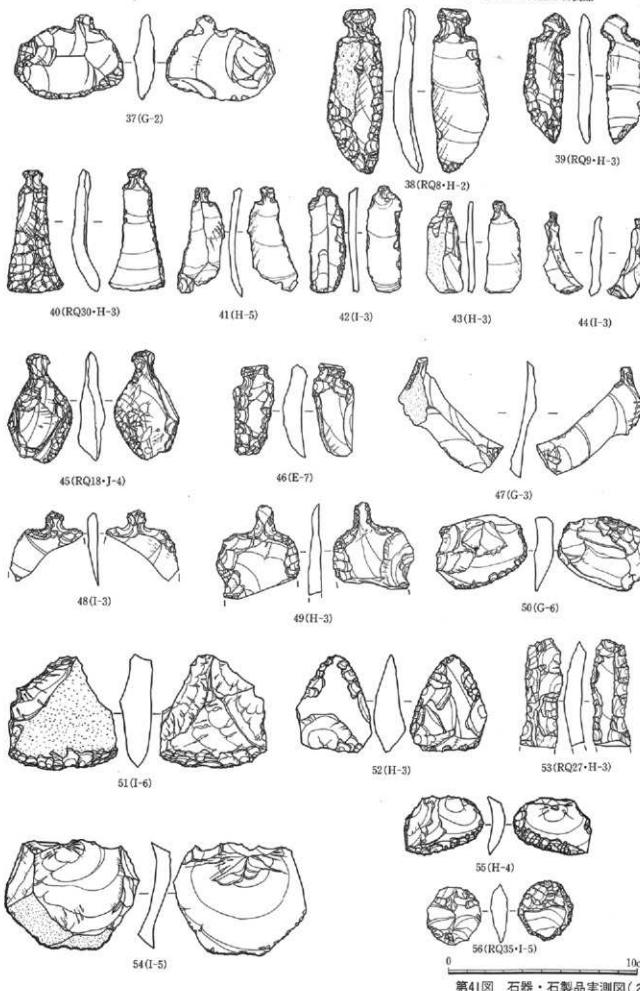
VI 出土した石器と石製品



- 58 -

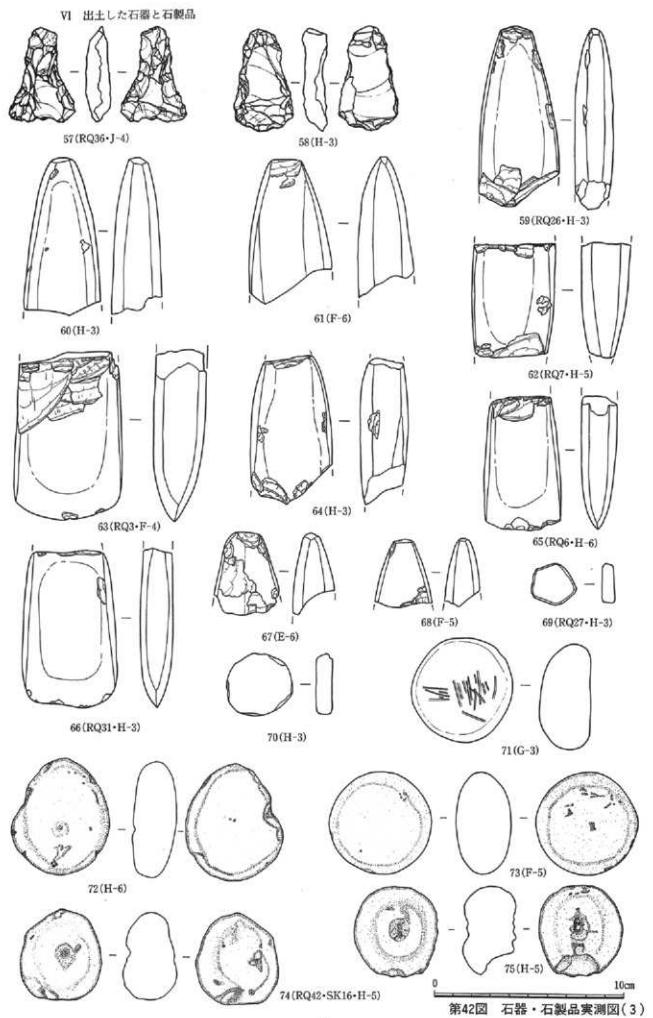
第40図 石器・石製品実測図(1)

VI 出土した石器と石製品

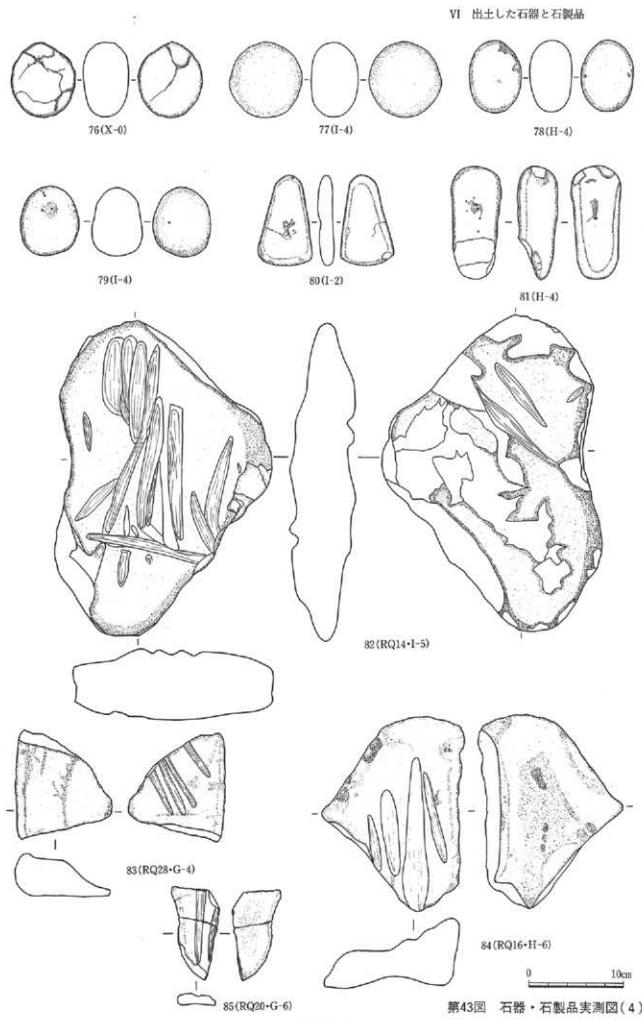


- 59 -

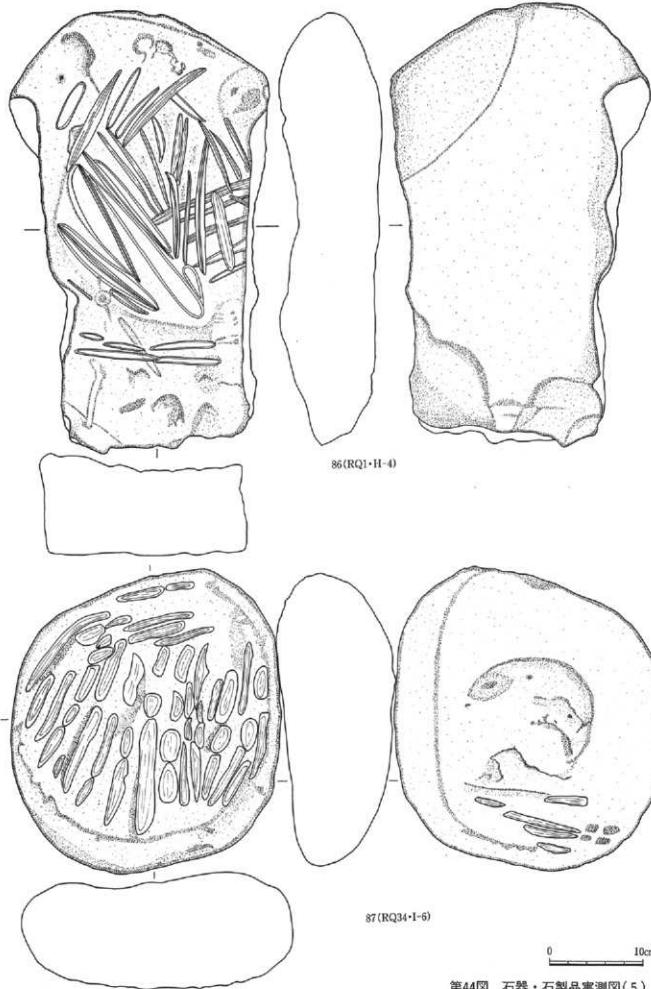
第41図 石器・石製品実測図(2)



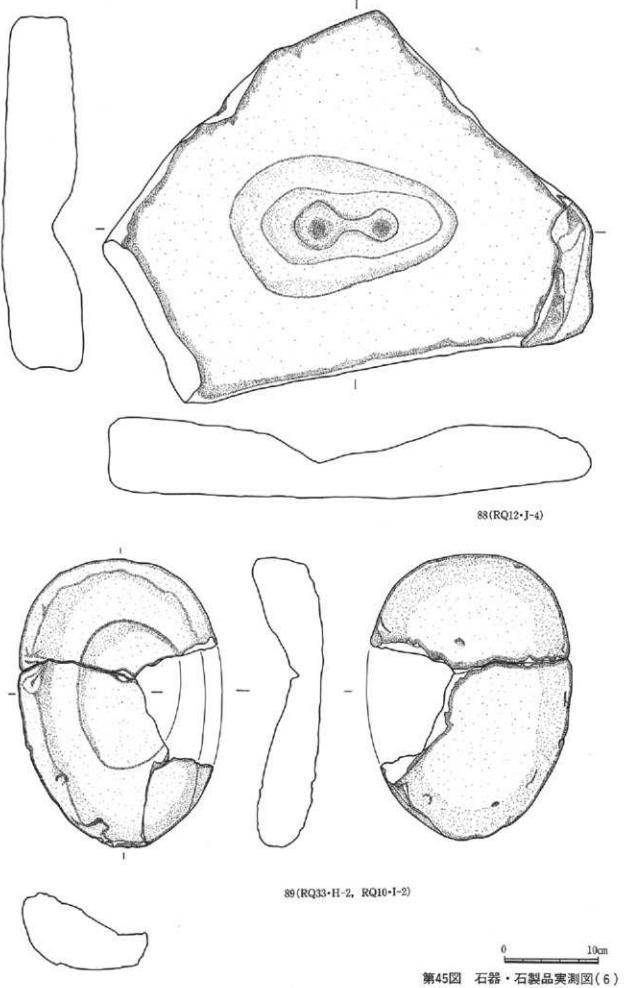
- 60 -



- 61 -

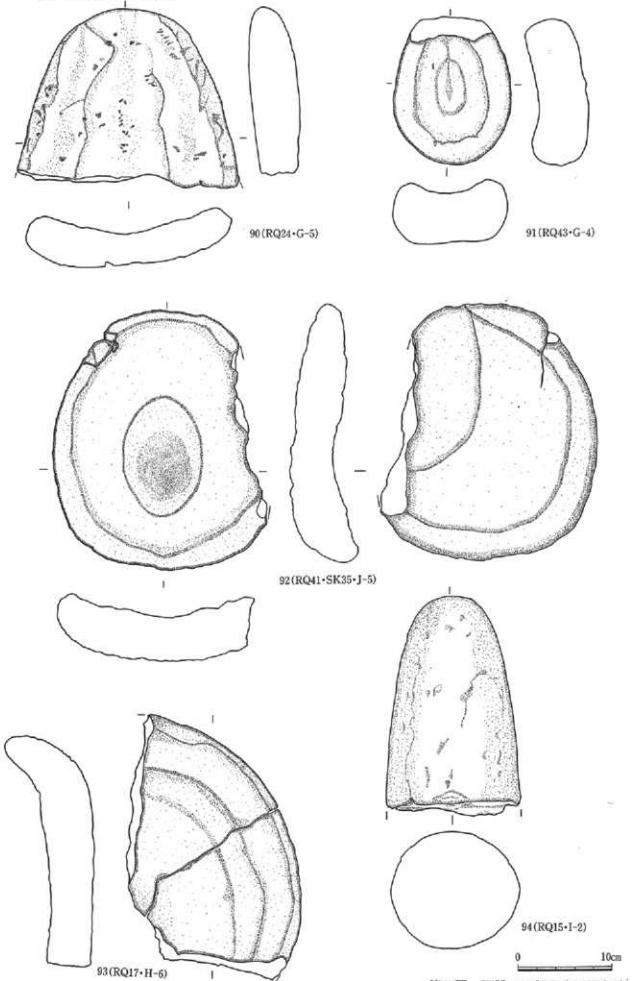


第44図 石器・石製品実測図(5)



第45図 石器・石製品実測図(6)

VI 出土した石器と石製品



第46図 石器・石製品実測図(7)

VI 出土した石器と石製品

表4 石器・石製品計測値一覧表(凡例)

- 出土石器・石製品について、長さはその全長、みかけの幅を幅、最大厚を厚さとして記した。
- 出土区、RPナンバーについても記した。

No.	種別	出土区	計測値(cm)	幅	厚	重さ(g)	備考	No.	種別	出土区	計測値(cm)	幅	厚	重さ(g)	備考	
1	石 核	G-4	6.2	1.0	0.6	6.7±0.20		74	不定形石器	B-4	4.1	4.1	1.0	20.7		
2	#	H-4	4.1	2.7	0.7	9.0±0.16		75	#	H-4	5.1	3.1	1.5	26.5±4.53		
3	#	F-4	3.1	1.6	0.6	3.7±0.14	RQ4	76	#	H-4	4.5	3.0	0.7	19.9±0.9	45-55	
4	#	G-4	2.5	1.9	0.8	3.4		77	#	H-4	2.8	1.5	0.9	3.6		
5	#	H-4	2.7	1.9	0.6	2.7±0.13	RQ5	78	圓 石	H-6	8.6	7.9	4.4	315		
6	#	H-4	2.6	1.8	0.5	1.8±0.22		79	#	I-4	9.5	7.8	7.5	616		
7	#	G-4	2.2	1.4	0.4	1.4		80	#	G-3	8.3	7.5	4.9	422		
8	#	G-6	2.0	1.4	0.2	1.2		81	#	I-6	9.1	9.1	6.7	667		
9	#	G-3	1.9	1.4	0.3	0.4		82	#	H-6	12.0	10.0	5.5	380	42-72	
10	#	H-3	2.6	1.5	0.5	1.8±0.10		83	#	H-5	9.5	8.5	4.0	42±75		
11	#	I-3	2.2	1.5	0.5	1.2±0.2	SK33 RQ46	84	#	G-4	9.5	8.3	4.5	500		
12	#	G-3	2.3	1.4	0.4	0.8±0.11		85	#	H-4	12.0	5.2	4.3	360	43-81	
13	#	H-6	2.2	1.4	0.4	0.7±0.12		86	#	X-0	11.0	7.5	4.6	484		
14	#	I-4	2.3	1.3	0.3	0.6±0.11		87	#	I-2	9.5	5.5	1.7	79±80		
15	#	H-6	1.8	1.5	0.3	0.6±0.17		88	#	H-4	9.5	8.3	5.2	505		
16	#	G-3	2.1	1.5	0.3	0.6±0.19		89	#	H-4	11.5	7.8	3.5	380		
17	#	I-4	2.0	1.5	0.3	0.5±0.19	SK1 RQ29	90	#	I-3	8.5	7.5	3.5	346		
18	#	G-4	1.9	1.7	0.3	0.7±0.45		91	#	C-4	9.2	6.7	4.4	518		
19	#	H-4	1.9	1.3	0.3	0.6±0.3		92	#	H-4	9.7	8.8	6.2	563	42-74 SK15 RQ42	
20	#	I-2	1.8	1.3	0.3	0.6±0.4		93	#	G-3	9.4	9.2	6.7	839		
21	#	P-4	2.0	1.2	0.3	0.4		94	#	H-6	10.3	8.4	4.9	458		
22	#	I-3	1.8	1.2	0.3	0.4±0.8		95	#	H-3	10.5	6.4	2.3	182	SX3	
23	#	H-3	2.0	1.2	0.4	0.6±0.6		96	#	H-7	8.7	7.0	5.0	505	F2	
24	#	H-3	1.7	1.2	0.2	0.4±0.6		97	#	H-6	10.5	8.4	4.8	480		
25	#	H-3	1.8	1.2	0.3	0.5±0.9		98	#	H-4	9.5	8.4	4.8	517		
26	石 核	V-5	6.8	3.5	1.1	20.4±0.25		99	#	I-3	12.4	5.3	3.7	205	SX3	
27	#	H-6	5.1	2.1	0.9	11.4±0.26		100	#	G-6	8.6	6.4	2.8	179		
28	#	J-4	4.1	2.1	1.3	11.4±0.25	SK8 F RQ58	101	#	G-4	11.0	5.3	3.2	114		
29	#	H-6	4.0	2.7	0.8	4.4±0.23	SK37 F RQ37	102	#	圓 石	G-5	7.8	4.8	5.9	269	
30	#	I-2	2.0	2.8	1.1	7.5±0.20	RQ21	103	#	I-3	8.3	7.8	6.4	600		
31	#	H-3	1.7	1.8	0.6	3.0±0.20	RQ23	104	#	G-5	10.0	9.2	6.0	605		
32	#	G-3	2.0	2.0	0.6	5.0±0.31		105	#	G-4	8.4	2.4	5.6	338		
33	#	G-3	2.7	1.0	0.8	4.0±0.30		106	#	H-6	8.1	4.1	4.0	363		
34	#	G-4	5.9	1.6	0.8	5.0±0.28	RQ2	107	#	H-5	7.6	5.6	3.7	170		
35	#	H-3	5.6	0.8	0.5	2.4±0.29		108	#	I-4	12.5	7.3	4.1	605		
36	石 核	H-2	8.7	2.9	1.6	23.4±0.38	RQ8	109	#	G-5	8.5	7.2	6.1	569		
37	#	J-4	5.8	3.3	1.8	16.2±0.45	RQ18	110	#	C-4	10.4	7.6	5.2	470		
38	#	H-3	6.9	2.0	0.7	10.2±0.39	RQ9	111	#	I-4	9.0*	6.3	5.7	415		
39	#	H-3	6.4	2.0	0.7	10.2±0.39	RQ30	112	#	H-2	10.1	8.0	6.1	492		
40	#	H-3	5.6	2.0	0.5	5.5±0.46		113	#	G-5	10.4	7.6	5.6	563		
41	#	H-5	6.5	2.1	0.5	4.8±0.41		114	#	G-6	10.3	7.6	3.9	309		
42	#	E-7	5.1	2.2	1.1	11.3±0.41	RQ46	115	#	F-5	10.7	10.6	5.8	970	42-73	
43	#	G-3	6.6	2.4	0.8	12.1±0.47		116	#	H-4	7.8	5.3	4.5	228±28		
44	#	E-3	4.9	1.9	0.5	4.3±0.43		117	#	I-4	7.8	7.5	4.9	410	43-77	
45	#	I-3	4.4	1.4	0.6	2.3±0.44		118	#	I-4	7.3	6.1	6.0	337	43-79	
46	#	G-3	4.7	6.8	1.3	29.1±0.35		119	#	X-0	8.0	6.9	4.5	353	43-76	
47	#	H-2	4.8	1.8	0.9	22.1±0.37		120	#	I-5	9.1	8.2	5.7	665		
48	#	G-2	5.2	1.6	0.5	5.1±0.37		121	#	I-3	8.2	7.5	4.0	358		
49	#	H-7	4.1	6.0	0.8	18.6±0.36		122	石 核	J-3	46.6	39.5	9.0	150,500	RQ12	
50	#	G-7	4.0	7.1	1.1	20.5±0.34	RQ32	123	石 核	J-5	28.6	21.5	5.5	4,700	RQ41 SK35	
51	#	H-3	4.4	4.3	0.9	18.2±0.49		124	#	H-2	29.5	21.0	8.6	4,000	RQ33	
52	#	H-3	3.4	5.7	0.8	11.5±0.33		125	#	H-4	31.3	18.0	5.0	3,750	46-93 RQ17+RQ22	
53	#	H-7	3.5	3.8	1.1	15.0		126	#	G-4	15.8	12.6	6.9	1,840	46-91 F2 RQ43	
54	#	I-3	2.0	3.7	0.7	5.1±0.48		127	#	G-5	17.7	23.0	5.5	3,400	46-90 RQ24	
55	石 核	H-3	5.4	3.2	1.3	24.1±0.58		128	石 核	I-2	23.5	14.2	13.0	5,200	RQ25	
56	#	I-4	2.0	3.2	0.5	5.0±0.57		129	石 核	I-2	23.5	14.2	13.0	5,200	RQ26	
57	不定形石器	G-6	8.5	5.8	1.7	59.7		130	#	I-6	31.2	28.5	12.8	15,000	44-67 RQ14	
58	#	G-4	3.0	3.0	1.1	9.5		131	#	I-5	27.5	24.6	8.3	5,100	43-82 RQ14	
59	#	H-4	2.6	3.3	0.8	7.5		132	#	H-6	22.6	15.1	7.8	1,920	43-84 RQ15	
60	#	I-3	3.3	2.9	0.9	6.7	SX3	133	#	G-4	10.4	10.1	4.2	463	RQ28	
61	#	J-5	3.3	3.0	1.1	7.2±0.46	RQ35	134	#	G-6	9.4	4.5	1.8	50	RQ20	
62	#	G-4	2.8	2.4	0.9	5.0±0.45		135	石 核	G-3	5.7	5.7	2.6	100	RQ7	
63	#	H-5	3.1	2.8	0.8	5.1		136	石 核	J-5	4.0	4.0	1.3	100	RQ26	
64	#	I-3	2.0	2.7	0.7	5.3		137	#	H-4	3.4	2.7	1.1	100	RQ25	
65	#	I-3	3.1	2.1	0.5	2.8		138	#	F-6	7.6	4.3	3.0	125	RQ41	
66	#	G-3	2.7	1.7	0.7	3.1		139	#	H-5	6.1	4.4	2.6	138	RQ7	
67	#	H-3	3.3	1.2	0.4	1.5		140	#	F-4	9.6	5.6	3.2	255	RQ3 43	
68	#	I-6	5.6	6.0	1.7	53.9±0.41	-51	141	#	H-3	7.9	4.3	2.5	147	RQ41	
69	#	H-3	5.4	4.7	1.1	20.0		142	#	H-6	7.1	4.1	1.9	109	RQ6	
70	#	G-6	3.3	3.0	1.0	18.6±0.50		143	#	H-3	8.2	5.5	1.3	164	RQ31	
71	#	C-6	5.5	3.2	0.9	17.7		144	#	F-5	5.6	3.4	1.1	100	RQ27	
72	#	H-3	5.7	1.9	1.1	13.7±0.43	RQ27	145	#	E-6	4.4	3.4	2.2	54	RQ47	
73	#	I-5	5.8	6.6	1.0	51.3±0.44										

VII まとめ

渡戸遺跡は押切川左岸の河岸段丘上に立地している。押切川の現川床との比高は約5mである。渡戸遺跡の発掘調査では遺跡範囲約100,000m²のうち、北西の隅に当たる1,500m²を調査した。調査では縄文時代の墓坑・遺物廻棄場などが検出された。出土遺物は229箱を数えそのほとんどは土器であり遺物廻棄場を中心として出土している。今回の発掘地点は遺跡の周辺部であり、中心的な部分はもっと東側寄りであると考えられる。

営まれた時期は断続的であったが縄文時代後期、縄文時代晩期、弥生時代、平安時代の4時期となり、縄文時代後期中葉に最大の発展を見せ、遺物の98%以上がこの時期のものである。その他の時期については、遺物の量は極端に少ない。

路線幅に沿って、南北に長く設定した発掘区では、中央やや北側に旧河道を検出した。旧河道は発掘区を横断するように確認され、内部に向かって、遺物の廻棄場が形成されていた。遺物廻棄場は面積約175m²であり、遺物包含層の最大の厚さは約50cmであった。廻棄された遺物は、ほぼ縄文時代後期の中葉に限界される。遺物の内容には、土器・石器・土製品・石製品があった。その中で、大きさ3cmほどのクッキー状の炭化物の資料は特筆されるであろう。また、川跡の一部には泥炭層が形成され、自然木や各種の種子類が検出され、当時の植物利用の実態が分かる資料が得られた。

廻棄は北側の川岸から行われ、そこには墓坑と思われる、集石を持つ40基ほどの土坑群が形成されていた。上面に2~8個程度の配石を配置し、平面形は大部分が大体が1m以内の小さな円形のもので、深さ50cm程度の半円形の振り方を持っている。この時期の墓坑は山形県内では明確なものとして検出されたことはなかった。副葬品あるいは供獻品と考えられる遺物の出土はほとんどなかった。埋設土器も検出されない。

黒曜石の剣片、蛇紋岩製の磨製石斧、あるいは土偶や石器に付着したアスファルトは、遺跡の周辺には産出しない。交易によってもたらされたものであろう。

出土した土器群は整理箱で200箱以上にもなり、かつ非常に近接した時期であると考えられる。出土した土器群は、時期別に第I~V群に分け、さらに第I群を第1~第17類まで細別した。第I群土器群は縄文時代後期の中葉、第II群は縄文時代後期中葉から末葉、第III群土器群は縄文時代晩期、第IV群土器群は弥生時代中期、第V群土器群は古代の各時期に比定できよう。第I群土器群の内、第1類と第2類とはほぼ十腰内I式の後半段階併行と考えたい。第3類~第7類とは大湯式などの一群に併行するものであろう。第8類から第12類はほぼ加曾利B式に併行する一群であると考えられる。第13類はほぼ宝ヶ峯式に併行する一群であると考えられる。このうち、出土土器群の主体をなすのは、第8類~第13類までの土器群である。これらは、山形県内ではまとまった資料の報告はほとんどない時期の資料である。村山市川口遺跡出土土器の一群からつながる時期の資料であり、貴重な成果を得た。

報告書抄録

ふりがな 書名	わたど いせきはっくちょうきほうこくしょ 渡戸遺跡発掘調査報告書						
副書名							
巻次							
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書						
シリーズ番号	第35集						
編著者名	山口 博之・渡辺 薫						
編集機関	財團法人山形県埋蔵文化財センター						
所在地	〒999-31 山形県上山市弁天二丁目15番1号 TEL0236-72-5301						
発行年月日	西暦1993年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
わたど いせき 渡戸遺跡	やまがた県 山形県 天童市 大字山口 字坊所	6621 335	38度 22分	140度 22分 45秒	19950508 ~19950811	1,500	広域農道 整備事業 (村山東部地区)
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
渡戸遺跡	捨場・墓地	縄文時代	土坑	縄文土器	調査箇所の中央に旧河 道が検出され、一部に は泥炭層の形成があつた。 旧河道右岸に沿つて遺物廻棄場が形成さ れ、完形土器・土偶等 が廻棄されていた。さ らに、その上方の河原 には集石土坑が営まれ ていた。		
		後期	集石土坑	石器			
		晩期	遺物廻棄場	土偶 土製品 石製品			
	弥生時代	弥生土器					
	平安時代	須恵器					

付 編

渡戸遺跡 自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

渡戸遺跡（天童市大山口字渡戸所在）は、押切川の河岸段丘上に立地する遺跡であり、縄文時代（中期、後期、晚期）、弥生時代（中期）、平安時代の各時代にわたる遺構、遺物が検出されている。川跡とされる遺構には、河床礫のくぼみに泥炭層が堆積し、縄文時代後・晚期の遺物が包まれている。また泥炭層の最上部には材の幹が倒たわっており、木道ではないかとみられている。今回の調査は、泥炭層堆積時の環境復元や植物利用について調べることを目的として、泥炭層中から検出された種実同定を行う。また、木道とされる木材の樹種同定や木道直下の土壤を対象とした花粉分析を併せて行い、種実遺体の情報と併せて古植生について検討する。

1. 試料

種実同定の試料は、泥炭層を水流選別して得られた試料20点である。また、樹種同定用試料は木道とされる幹材2点、花粉分析用試料は木道の直下の土壤を採取してそれぞれ分析に用いる。分析試料については、表1にまとめた。

2. 方法

1) 花粉分析

試料約15gについて、水酸化カリウムによる泥化、0.25mmの篩による篩別、重液（臭化亜鉛：比重2.2）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス処理の順に物理・化学的処理を施し、花粉化石を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を操作し、出現する全ての種類（Taxa）について同定・計数する。

結果は、木本花粉は木本花粉総数、草本花粉・シダ類胞子は総花粉・胞子数から不明花粉を除いたものを基準とした百分率で出現率を算出し図示する。図表中で複数の種類をハイフンで結んだものは、種類間の区別が困難なものである。

2) 樹種同定

刺刀の刃を用いて、試料の木口（横断面）・粂目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製する。切片は、ガム・クロラール（泡水クロラール・アラビアゴム粉末・グリセリン・蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートとする。プレパラートは、生物顕微鏡で透過光による木材組織の観察を行い、その特徴から種類を同定する。

3) 種実同定

双眼実体顕微鏡下でその形態的特徴から種類を同定する。試料は、種類ごとに分別し、

ほう酸とほう砂の混合液中に保存した。

表1 分析試料一覧

試 料 名	試料の質 (分析手法)
RN-10 花粉分析土壤	土壤 (花粉分析)
RN-10 木材	木材 (樹種同定)
RN-20 E-6 G	木材 (樹種同定)
1 土壤サンプル河跡 渡戸No.1	種実 (種実同定)
2 土壤サンプル河跡 渡戸No.1	種実 (種実同定)
3 土壤サンプル河跡 渡戸No.2	種実 (種実同定)
4 土壤サンプル河跡 渡戸No.2	種実 (種実同定)
5 土壤サンプル河跡 渡戸No.2	種実 (種実同定)
6 土壤サンプル河跡 渡戸No.2	種実 (種実同定)
7 土壤サンプル河跡 渡戸No.2	種実 (種実同定)
8 土壤サンプル河跡 渡戸No.3	種実 (種実同定)
9 土壤サンプル河跡 渡戸No.3	種実 (種実同定)
10 E-6 G 木のまわり 渡戸No.4	種実 (種実同定)
11 E-6 G 木のまわり 渡戸No.4	種実 (種実同定)
12 E-6 G 木のまわり 渡戸No.5	種実 (種実同定)
13 E-6 G 木のまわり 渡戸No.5	種実 (種実同定)
14 E-6 G 木のまわり 渡戸No.5	種実 (種実同定)
15 E-6 G 木のまわり 渡戸No.5	種実 (種実同定)
16 E-6 G 河跡 自然遺物	種実 (種実同定)
17 E-6 G 河跡 自然遺物	種実 (種実同定)
18 RN-9 E-6 G 河跡	種実 (種実同定)
19 RN-9 E-6 G 河跡	種実 (種実同定)
20 E-3 G 河跡	種実 (種実同定)

・試料に付した丸付きの数字は丸を取って表記する。

3. 結果

1) 花粉分析

結果を表2・図1に示す。花粉化石群集は、木本花粉の割合が高く、草本花粉は少ない。木本花粉は、マツ属(主に複管束胚属)が最も多く、コナラ属コナラ亞属、ニレ属ニケヤキ属などの比較的多い。草本花粉は、イネ科やヨモギ属などが検出されるが、いずれも個数が少ない。

2) 樹種同定

試料は、2点ともニケヤキに同定された。解剖学的特徴などを以下に記す。

・ニケヤキ (*Zelkova serrata*(Thunb.)Makino) ニレ科ニケヤキ属

環孔材で孔眼部は1~6列、孔眼外でやや急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合す

種類	試料番号 RN-10
木本花粉	
モミ属	1
ツガ属	2
トウヒ属	1
マツ属	130
スギ属	1
クルミ属	12
カバノキ属	1
ハンノキ属	1
ブナ属	3
コナラ属コナラ亞属	32
コナラ属アカガシ亞属	1
クリ属	3
ニレ属ニケヤキ属	44
エノキ属一ムクノキ属	1
トチノキ属	4
シナノキ属	1
ウコギ科	2
草本花粉	
イネ科	5
カヤツリグサ科	2
マメ科	1
ヨモギ属	1
他のキク亜科	1
不明花粉	2
シダ類胞子	
シダ類胞子	78
合計	
木本花粉	240
草本花粉	10
不明花粉	2
シダ類胞子	78
統計(不明を除く)	328

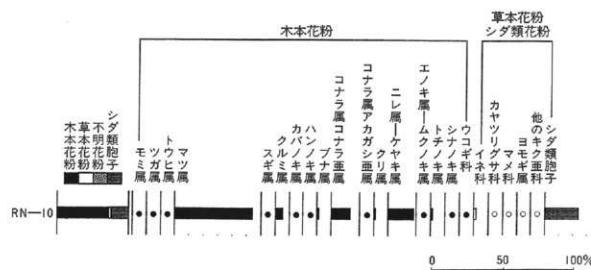


図1 花粉化石組成

出率は、木本花粉はその総数、草本花粉は総花粉・胞子数から不明花粉を除いた数を基数として百分率で表示した。なお、○は1%未満を示す。

る。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性丁型、1~6細胞幅、1~30細胞高で、しばしば結晶を含む。

以上の特徴から、幹材ではなく根株材と考えられる。

3) 種実同定

結果を表3に示す。検出された種類はほとんどが木本類である。以下に検出された種類の形態的特徴について記す。

- ・オニグルミ (*Juglans mandshurica* Maxim. subsp. *sieboldiana* (Maxim) Kitamura)

クルミ科クルミ属

核が検出された。褐灰色で大きさは3cm程度。側面の両側に縫合線が発達する。広卵形で、基部は丸くなっているが先端部はやや尖る。表面は荒いしわ状となり、縱方向に溝が走っている。

- ・クマシデ (*Carpinus japonica* Blume) カバノキ科クマシデ属

果実が検出された。黒褐色で、大きさは5mm程度。側面觀は深型、上面觀は凸レンズ型。表面には縱方向に数本の筋が存在する。

- ・クロモジ属 (*Lindera* sp.) クスノキ科

種子が検出された。黒褐色で、大きさは6mm程度。球形で一端に「へそ」がある。種皮は薄くて堅く、表面は平滑で光沢がある。.

- ・カジノキ属 (*Broussonetia* sp.) クワ科

種子が検出された。褐色。大きさは1.5mm程度。倒卵型、表面にはいぼ状の模様が粗く配列し、側面の隅に突起がみられる。

- ・クワ属 (*Morus* sp.) クワ科

種子が検出された。褐色。大きさは2mm程度。倒卵型、表面は平滑で側面の隅に突起がみられる。

- ・ホウノキ (*Magnolia obovata* Thunb.) モクレン科コブシ属

種子が検出された。大きさは1cm程度。黒褐色、偏平な梢円形で、片側が凸である。片面は中心部が溝状にへこみ、下端に大きな「へそ」がある。種皮はやや薄くて堅く、全体に粗いしわ状模様があるが、凸面で顯著である。

- ・マタタビ属 (*Actinidia* sp.) マタタビ科

種子が検出された。黒色。側面觀は長梢円形。大きさは3mm程度。表面は硬質で光沢があり、丸いへこみが不規則に配列しているように見える。

- ・ミツバウツギ (*Staphylea Bumalda* DC.) ミツバウツギ科ミツバウツギ属

種子が検出された。黄褐色で、大きさは6mm程度。梢円形で、一端に大きな「へそ」があり、梢円が欠損しているようにみえる。種皮は厚くて堅く、表面は平滑で光沢がある。

- ・サンショウウ (*Zanthoxylum piperitum* DC.) ミカン科サンショウウ属

果実が検出された。黒褐色、梢円形で大きさは4mm程度。表面には浅い不規則な網目模様がみられる。

表3 種実同定結果

試料番号	種類/部位	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
オニグルミ	核	10																			
クマシデ	果実	3	10																		
クロモジ属	種子																				
カジノキ属	種子	2																			
クワ属	種子	1																			
ホウノキ	種子																				
マタタビ属	種子	約350																			
ミツバウツギ	種子	2																			
サンショウウ	種子																				
ブドウ属	種子	2		1																	
ブドウ科	種子																				
クサギ	核																				
トチノキ	種子	約500																			
ミズキ	核	1																			
エゴノキ属	核	6																			
ニワトコ	種子	12																			
クア属	果実																				
ナデシコ科	種子	1																			
マイ科	種子																				
ナス科	種子																				

・ブドウ属 (*Vitis* sp.) ブドウ科

種子が検出された。黒色。大きさは 5 mm 程度。心臓形。腹面には中央に縦筋が走り、その両脇には横円形に深くくぼんだ穴が存在する。背面には中央に「きじ」状の「へそ」があり、「へそ」回りはくぼんでいる。

・クサギ (*Clerodendron trichotomum* Thunb.) クマツズラ科クサギ属

種子が検出された。黒褐色、半球状で、大きさは 6 mm 程度。種皮は薄くてやや堅い。球面側には粗い網目状の模様があり、反対側はやや内側に凹む。

・トチノキ (*Aesculus turbinata* Blume.) トチノキ科トチノキ属

種子の破片が検出された。黒色で、薄くて堅く、大きなもので 3 cm 程度。表面には黒く馴のある部分と、黒褐色でざらつく部分がある。

・クランノキ (*Aralia elata* (Miq) Seemann) ウコギ科

核が検出された。茶褐色で側面観は半円形、上面観は卵形。長さ 2 mm 程度。核はやや厚くて硬い。核の表面には不規則な瘤状突起がある。

・ミズキ (*Cornus controversa* Hemsl.) ミズキ科ミズキ属

核の破片が検出された。褐色で大きさは 4 mm 程度。縦方向にややつぶれた球形。基部に大きな鱗がある。縦方向に走る溝がみられるがほとんど磨耗している。

・エゴノキ属 (*Styrax* sp.) エゴノキ科

核が 4 個検出された。灰黒色。側面観は横円形、上面観は円形。長さ 1 cm 程度。下端に大きな「へそ」があり、表面に 3 本の浅い溝がある。核は厚く硬い。

・ニワトコ (*Sambucus racemosa* L. subsp. *sieboldiana* (Miquel) Hara)

スイカズラ科ニワトコ属

種子が検出された。黒色。長楕円形で、長さ 2 mm 程度。下側に脐があり、表面には横筋に平行なしわ状の模様が存在する。

・タデ属 (*Polygonum* sp.) タデ科

果実が検出された。黒褐色で大きさは 3 mm 程度。3 棱形で、表面はざらつく。

・ナデシコ科 (*Caryophyllaceae* sp.)

種子が検出された。黒色で、大きさは 2 mm 程度。表面には細かい突起が密に配列する。

・マメ科 (*Leguminosae* sp.)

果実が検出された。褐色、腎臓形で、大きさ 3 mm 程度。側面に縦長の「へそ」が存在する。

・ナス科 (*Solanaceae* sp.)

種子が検出された。腎臓形で、側面のくびれた部分に「へそ」があり、表面には「へそ」を中心として同心円状に網目模様が発達する。大きさは 2 mm 程度。黒褐色。表面は柔らかい。網目模様はやや細かく、歯は波うっている。

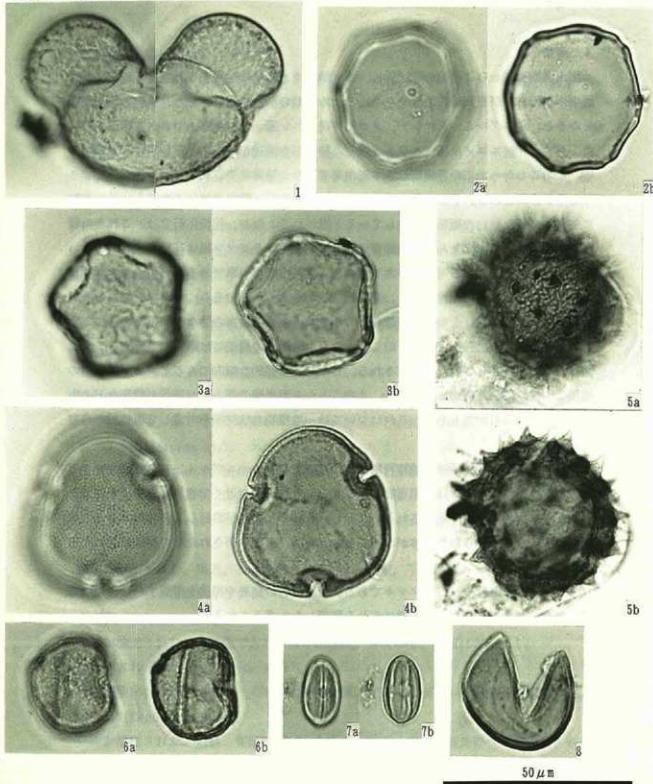
4. 考察

出土遺物などから、遺構の時代性は、縄文時代後・晩期に相当すると考えられる。泥炭層中の花粉および種実遺体の組成をみると、木本類の割合が高い。また、検出される種類をみると、オニグルミ、クマシデ、クロモジ属、ニレ属—ケヤキ属、マタタビ属、トチノキ、クランノキ、エゴノキ属、ニワトコなど、林縁部や渓谷を中心に分布している種類が多い。このことから、この泥炭層は木本質由来であり、林縁部や谷筋などから流れ込んできたものと推測される。すなわち、今回得られた花粉化石・種実遺体は、当時の林縁や谷筋に生育していた植物の種類を反映していると思われる。なお、花粉化石では、これらの種類に加えてマツ属（ほとんどが複雑管束葉脈）が多産する。マツ属は花粉の生産量が多いので、過大に評価される可能性があるものの、50%強の出現率であることから、マツ林が近くに存在していた可能性がある。遺跡の立地からすれば、おそらくアカマツであると思われるが、アカマツは土地条件の悪いところや、山火事や伐採の跡など開けた場所に二次林として存在する場合が多い。このことから、当時遺跡の周辺には陽樹が生育するような開けた空間が存在していたと推定される。しかし、全国的な傾向でみると、マツ属花粉の増加は中世以降、普遍的にみられる。このことから泥炭層の最上部が後代の搅乱などの影響を受けている可能性もある。これについては、堆積物の状況等を考慮して再検討の必要がある。

今回検出された種実遺体を植物利用の面から考えると、オニグルミ、クワ属、マタタビ属、ブドウ属、トチノキは食用可能である。これらは遺跡の近くで容易に入手できたであろうから、当時の利用が示唆される。しかし、今回は、表面が磨耗した個体があることや、食用とするために割られた個体がないことなどから、直接利用されたものが破棄された可能性は低い。

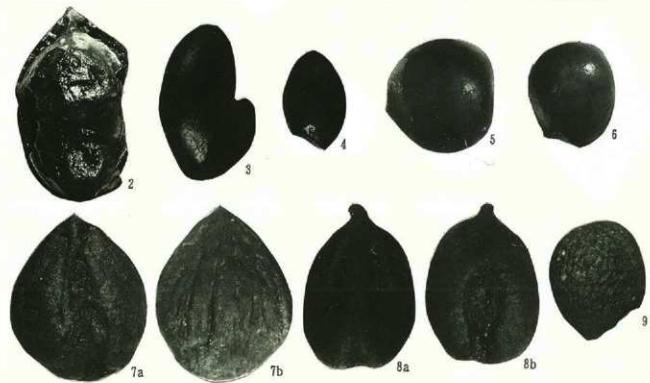
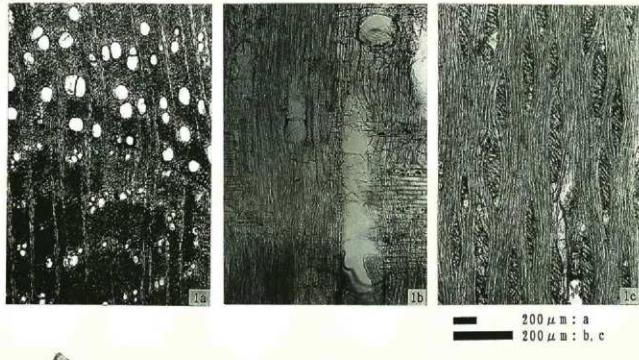
また、木道とされる試料はケヤキである。花粉分析の結果や用途を考慮すれば、遺跡周辺にケヤキが生育しており、木材はそれを利用したと考えられる。

図版 1 花粉化石



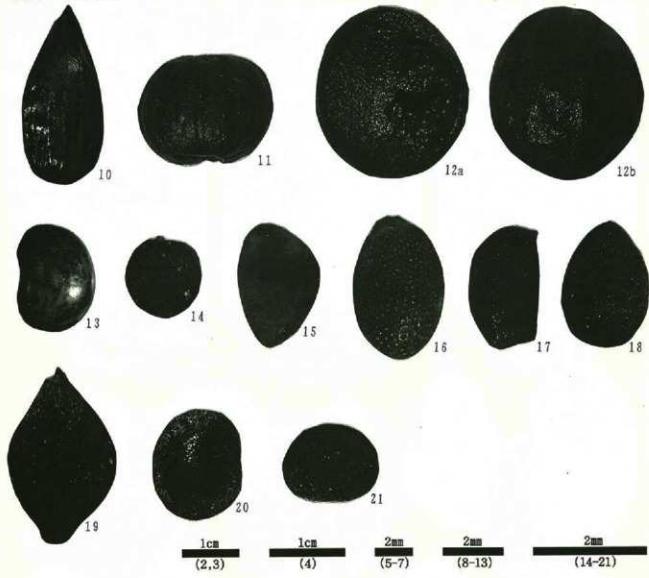
1. マル属 (RN-10)
3. ニレ属—ケヤキ属 (RN-10)
5. キク科 (RN-10)
7. クリ属 (RN-10)
2. クルミ属 (RN-10)
4. シナノキ属 (RN-10)
6. コナラ属コナラ亜属 (RN-10)
8. スギ属 (RN-10)

図版 2 木材・種実遺体



- | | |
|-------------------------------------|--------------|
| 1. ケヤキ (a:木口 b:胚目 c:板目:RN-20 E-6 G) | 3. トチノキ (15) |
| 2. オニグルミ (3) | 5. クロモジ属 (6) |
| 4. エゴノキ属 (16) | 7. ホウノキ (14) |
| 6. ミツバウツギ (11) | 8. ブドウ属 (14) |
| 8. サンショウ (14) | |

図版3 種実遺体



10. クマシデ (4)
12. クサギ (6)
14. カジノキ属 (1)
16. マタタビ属 (1)
18. ニワトコ (1)
20. ナデシコ科

11. ミズキ (14)
13. マメ科 (4)
15. クワ属 (1)
17. タラノキ (1)
19. タデ属 (7)
21. ナス科 (13)

図 版

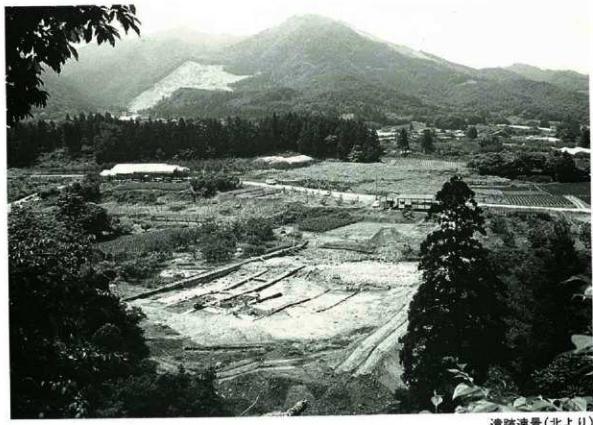
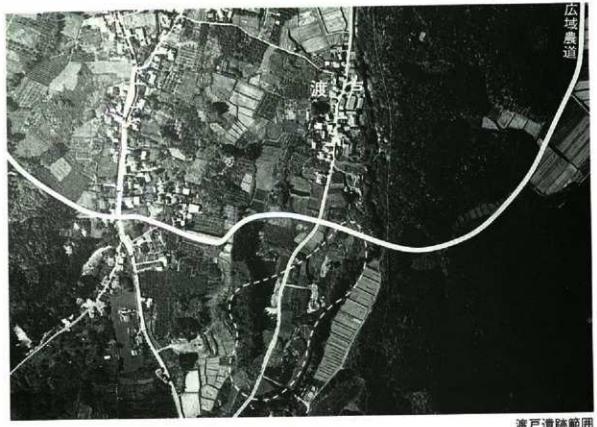


遺跡全景(北より)

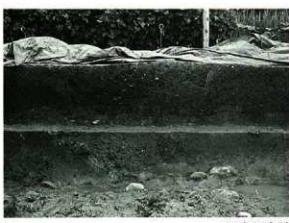


遺跡全景(東より)

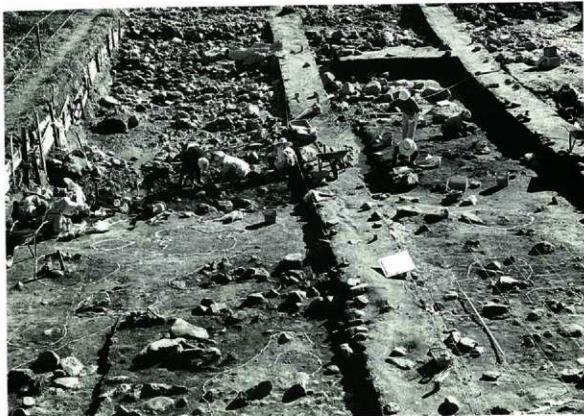
図版 2



図版 3



図版 4



遺物廻叢場調査状況

図版 5



土偶(RP83)出土状況

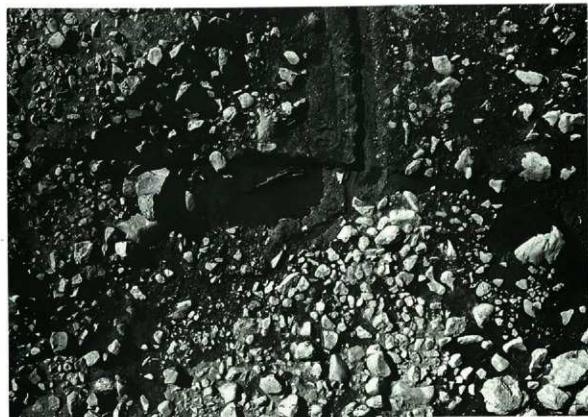


遺物廻叢場調査状況



土器(RP42・43)出土状況

図版 6



自然木検出状況(G-6 グリッド)

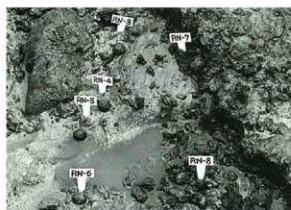


自然木検出状況(上図の直下)

図版 7



泥炭層(自然木)調査状況(G-6 グリッド)



同上自然遺物出土状況(クルミ)



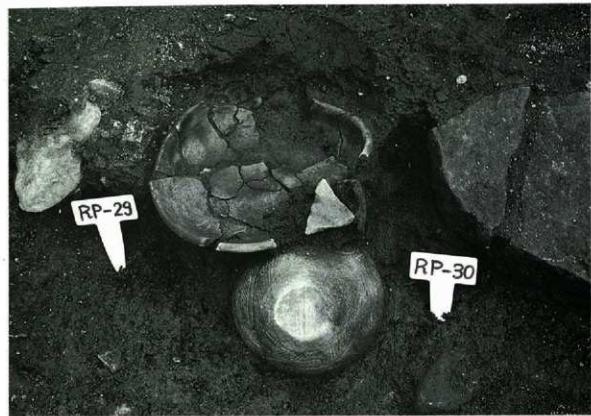
同上自然遺物出土状況(種子)



同上土器出土状況(RP98)



同上完掘状況



遗物出土状况(RP29・30)



RP34出土状况



RP16出土状况



RP109出土状况



RP88出土状况



RP54出土状况



RP53出土状况



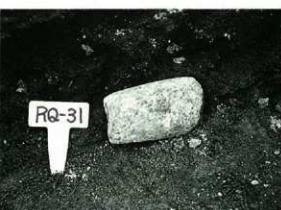
RP48出土状况



RP60出土状况



タッキー状炭化物出土状况



石斧出土状况



石皿出土状况



砾石出土状况

図版10



遺構調査状況(西より)



遺構調査状況(真上より)

図版11



遺構調査状況(東より)



SK 1 検出状況



SK 1 調査状況



SK 39調査状況



SK 40調査状況

図版12



SK 9 検出状況



SK 9 完掘状況



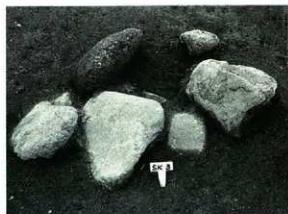
SK 35 調査状況



SK 35 完掘状況



SK 2 検出状況



SK 3 検出状況



SK 2・3 調査状況



SK 38 調査状況

図版13



出土土器(RP34)



出土土器(RP14)



出土土器(RP60)



出土土器(H・G-3 グリッド)



同左内面写真



出土土器(RP43)



出土土器(RP16)



出土土器(G-6)



出土土器(F-5)



出土土器(RP98)



出土土器(RP109)



出土土器(RP99)

出土土器(G-5)



出土土器(H-3)



出土土器(G-5)



出土土器(RP78)



出土土器(H-5)



出土土器(RP90)



出土土器(RP88)



出土土器(G-3)



出土土器(X-0)



出土土器(RP30)



出土土器(G-6)



出土土器(E-5)



出土土器(H-4)



出土土器(H-4)



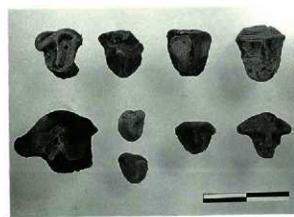
出土土器(RP89)



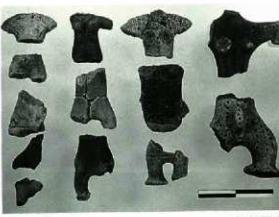
出土土器(G-5)



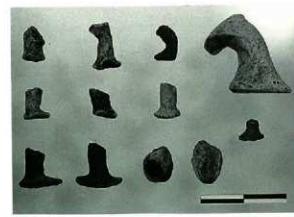
土偶集合写真



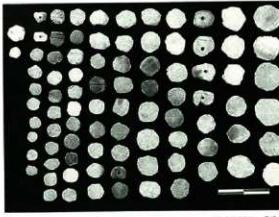
土偶頭部



土偶体部



土偶下肢



円板状土製品



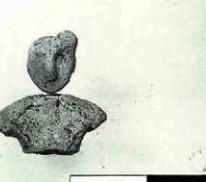
出土土偶(RP22)



出土土偶(RP61+RP12)



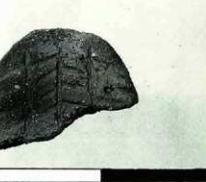
出土土偶(RP53+RP83)



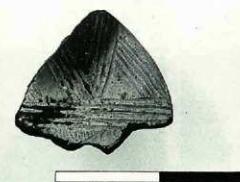
出土土偶(G-3+H-3)



スタンプ状土製品(RP50)



土版(RP 9)



土版(RP 5)



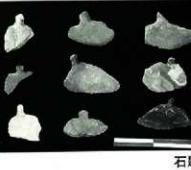
土版(RP 8)



石鏃



石鎌



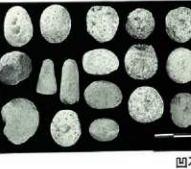
石匙



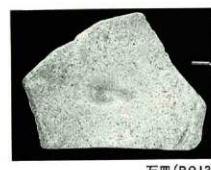
石匙



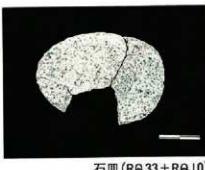
石斧



凹石



石皿(RG12)



石皿(RG33+RG10)



石皿(RG17+RG22)



石皿(RG43)



砥石(RG14)



砥石(RG20)



アスファルト付薫石鏃(S=100%)



アスファルト付薫石匙(S=88%)



アスファルト付薫石匙(S=54%)

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第35集

渡戸遺跡発掘調査報告書

1996年3月31日 発行

発行 財團法人 山形県埋蔵文化財センター

〒999-31 山形県上山市弁天二丁目15番1号

電話 0236-72-5301

印刷 藤庄印刷株式会社